2014

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2014年
3月号
No.609

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2014年
2月号
No.608

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2014年
1月号
No.607

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2014年
6月号
No.612

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2014年
5月号
No.611

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2014年
4月号
No.610

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2014年
9月号
No.615

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2014年
8月号
No.614

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2014年
7月号
No.613

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2014年
12月号
No.618

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2014年
11月号
No.617

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2014年
10月号
No.616

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2014年
1月号
No.607

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

謹賀新年

平成二十六年　元日

温故知新

仙溪

「温故知新」は孔子が論語の中で、師となる条件として先人の思想や学問を研究するよう延べた言葉で、「ふるきをたずねてあたらしきをしる」とも読まれている。

ここで「温」という字が使われているのは何故だろう。うわべだけでなく、時間をかけて温めるように研究しなさいということだろうか。私たちのまわりの古くからあるもの。古くから伝わること。それらに命を吹き込めということだろうか。

私たちの花道では練習ではなく「稽古」と言う。「稽」は「考える」という意味で、「いにしえをかんがえる」ということになる。昔のことを調べ、今なすべきことは何かを正しく知るというのが元の意味で、学問での言葉だったのが、芸能や武術を学んだり習うことにも使われるようになった。

先人の思想や学問を研究したり、昔のことを調べなさいと言われても、何から手をつければいいものか。でも、自分自身が道に迷ったり、物事に行き詰まった時に、昔の人はどうしてたんだろうかと、その時初めて自分で「探す」というのでいいと思う。大事なのはもがいて掴もうとする求道の精神だ。

今まで導いてくれた両親を亡くして、大切なものを「探す」毎日。「稽古」と「温故知新」を肝に銘じて、いけばなの道を進んで行こうと思う。

山茱萸　椿

仙溪

花型　草型　内副流し

花器　鉄釉広口花瓶

山の茱萸（ぐみ）と書いて山茱萸（さんしゅゆ）。春に黄色の小さな花が密集して咲き、秋に楕円形の赤い実がぶら下がる。見るからに美味しそうだが、お弟子さんが蜜煮にしてくださったことがあり、なかなか美味だった。韓国では庭に植えておき、実は薬にすると聞いたことがある。強精薬、止血、解熱作用があるらしい。

春の花の黄色も鮮やかだが、初冬に葉が落ちたあと、たわわに赤い実がぶらさがっている姿も感動的である。つるりとした赤い実の力強さは、大陸由来のものだ。

山茱萸は中国、朝鮮半島の原産で、日本へは江戸時代中期に薬用としてもたらされた。水木科・水木属の落葉小高木。枝にねばりがあり、撓めがきくので生花の稽古にもよくいける。

花屋で急角度に曲がった枝を見つけたので、内副に用いてみた。どんな作用でこんな曲がり方をするのだろう。猿が折ったのがそのまま固まったものか。

能の中の立花　仙溪

能の「半部（はじとみ）」の前場は僧侶が立花供養をしているところから始まる。

「立花供養」とはどんなものか。

「花の供養。花を立てて、花に回向する。」（中央公論社『解註・謡曲全集』より）

「切り取られた花々のために花を生けて、供養を行う仏事。」（小学館『日本古典文学全集』謡曲集より）

この「花を供養する心」が「半部」の要になっていると思う。

「半部」はじとみ

作者　内藤左衛門

素材　『源氏物語』夕顔の巻

場所　前：都・紫野雲林院（京都市北区紫野雲林院町）

後：都・五条の辺（京都市下京区五条通辺り）

季節　秋

時代　平安時代の想定

演能時間　約1時間20分

■あらすじ

都の雲林院の僧が夏の修行の終わりに立花供養を行っていると、1人の女が現れ夕顔の花を手向ける。僧が名を尋ねても答えずに五条辺りに住むことだけを言い残して花の陰に消え失せた。所の者に光源氏と夕顔の恋物語を聞いた僧は夕顔の霊を弔うため五条辺りを訪ねると、軒先に夕顔の花が咲いた荒れ果てた家がある。秋の月を眺め『源氏物語』を忍んでいると、半部が押し上げられ夕顔の霊が現れ、夕顔の花が縁で契った光源氏との恋の思い出を語り舞を舞う。やがて夜明けの鐘の音と共にまた半部の中に消え去った。

■語句解説

半部（はじとみ）：昔の建築様式で寝殿などの板壁の一部。上半分を窓のように押し上げられる蔀戸（しとみど）。

蔀戸（しとみど）：格子の裏に板を張った雨戸。

■小書

立花供養（観世・宝生・金剛・喜多）　※舞台に実際に立花が供えられる。替之型（金剛）

（ここまで、大槻能楽堂ホームページより転載）

能「半部」の舞台に立てられた松真の立花。父・仙齋作。一九八一年四月。

「源氏・拾花春秋」『夕顔』より「夕顔の生花」。仙齋画。

光源氏が下町でめぐりあった美女の家の垣根に仄々（ほのぼの）と咲いていた夕顔の花。源氏がこの女性を夕顔と呼んで愛したのもつかの間、はかなく世を去ってしまう。「半部」ではこの夕顔の霊が現れて供養を願い出る。

夕顔の霊は、花を大事にする僧侶に心を開いて蔀戸（しとみど）を開ける。源氏の君に摘まれて命を縮めたのは幸せな一夜の想い出。後悔はなかったようだ。

「半部（はじとみ）」で思い出すのは、父（仙齋）が舞台の立花を担当した時のこと。私は大学の3回生だった。「テキスト215号（1981年5月）」で紹介されているので次に引用する。

4月12日に大阪のフェスティバルホールで上演される能楽「半部」のための立花を頼まれていたので10日から幹作りにかかった。

11日には大阪に運び、フェスティバルホールの大舞台で組み上げたが、2mの高さと横幅、奥行きがあるので相当な重量になる。しかも上演の際、橋がかりを舞台まで演者によって運ばれるのである。だから絶対ゆれても崩れないようにきっちりした立て方をしなければならない。

又観客の方から見ての遠目を考えて、それぞれの枝の減り張（めりはり）もはっきりつけなくてはならない。

おまけに四方正面の立花でなくてはならないと「なくてはならない」が、うんと付く花である。

だが吉田忠史君と中川和則君の協力で、楽しく仕事が出来て、美しい品の良い立花が立てられた。12日の当日は前記の二人に櫻子がついて行ってくれ、いざという時にそなえて、中川君が能装束をつけて舞台の袖で待機していてくれたそうである。（引用おわり）

文中の中川君というのが私である。

「幹作り」は主に松の立花を立てる場合に、その骨組みを作る作業のことで、幹をとめる切り口の切り方や立て幹への留め方に熟練の技が必要となる。今は電動ドリルというものがあるので、木ねじで簡単にできる作業も、昔は錐（きり）で穴を開けて釘を打って留めていた。そうすると、必ず一度は指を金槌でたたいてしまう。みんな痛い思いをしながら腕をあげてゆくのである。

さて、家元宅で手にあざをつくりながら立花の下準備を手伝い、翌日大阪へ運んで舞台脇で仕上げたわけだが、写真のように大層立派な立花だった。四方どこからみてもバランス良く、立花とは美しいものだなと思ったことを覚えている。

本番の日、父は母とはなと3人で岡山県の直門会いけばな展へ行かねばならず、吉田さん、櫻子、私の3人が立花の守り役になった。演者の衣装が当たって倒れた時には私が飛び出ていき、対処することになっていた。羽織袴を着せられて、じっと舞台を見つめ続けたので、心身共にくたくたになった。幸い立花は倒れることなく、重厚な松に正真の杜若が映えて大変好評で、ただ舞台袖で見守っていただけだったが、大役をやり終えた安堵感で、帰り道の気分爽快であったことも思い出される。

私が父の立花を手伝った、おそらく最初の想い出である。

古い中国の器

＜表紙の花＞　仙溪

器の要素には色、質感、形があるが、なかでも「形」の不思議さというか、微妙な違いで感じ方が変わるのが面白いと思う。

表紙の器は古い中国の器だが、口の作り方から陶工の凄みのようなものを感じて、持つ手が震えた。これだけ完璧な姿であるにもかかわらず、口の作りは裂けた岩のような自然な仕上げで、いかにも花が挿されるのを待っている気配がする。

花をいけると隠れて見えないので、いけた花はなんともおおらかな豊かさを感じる花になる。けれども花を挿す最初の緊張感はこの器ならではのものだ。

緊張する器。なんでも映える器。器も様々である。

花材　仏手柑（ぶっしゅかん）（蜜柑科）
　　デンファレ二種（蘭科）
花器　龍耳付瑠璃釉壺

こま型の花器

＜2頁の花＞　櫻子

20年ぶりくらいに蔵の整理整頓を行なった。奥に仕舞われていて、中々お目見えしない花器も多いのだが、久しぶりに懐かしい花器も出てきた。

この花器は1976年に、両親が祖父へのお土産にローマで買ってきたもの。（テキスト156号で紹介）

イタリアらしい明るい色使い、ユニークなかたち。祖父は気に入って、よく花をいけていたことを思い出した。小さいけれどぴりっと強い感覚をうける花器とテキストには書かれている。花のことは丁寧に書かれていたが、花器の話はそれほど多くない。もっと書いて欲しかったなと思う。

花材　若松（松科）
　　葉牡丹（油菜科）
　　オンシジウム（蘭科）
花器　細口陶花器

襲名記念の器

＜3頁の花＞　仙溪

テイカカズラは茎から気根を出して他のものに固着する、蔓性常緑低木。和名は、式子内親王を愛した藤原定家が、死後も彼女を忘れられず、ついに定家葛（ていかかずら）に生まれ変わって彼女の墓にからみついたという伝説に由来する。能の「定家」にもこの話がでてくる。

定家葛の花はジャスミンに似ていて香りもいい。花のあとの実は写真のように2本の細長い袋状で、やがて裂けると白い綿毛のついた種子が風で飛んで行く。

花フジさんがこの定家葛をくださった。大切な一枝なので私の家元襲名記念の器にいけた。花と器の組み合わせも気に入っている。

花材　定家葛（夾竹桃科）（きょうちくとう）
　　水仙（彼岸花科）　赤椿（椿科）
花器　朱塗盃「冨春盃」

彫刻の花器

櫻子

この花器も祖父が好んで良くテキストで花をいけていた。

横長の平たい形だが、生花をいける事もあったし、洋花や和花どちらも合わせていたようだ。

お稽古用の花器で、普段に使っていた。

どっしりと重いので、砂利、剣山、水、花を入れると気合なくしては持ち上げられない。それほどに重い！だが安定の良い花器は安心して花もいけられるし、どんな形にも作る事が出来る。

焦茶色で菊の柄のように彫刻された図案だ。

力強いけれど、主張しすぎず、いける花の事を考えて作られた良い花器だなと思う。

小豆柳、椿、臙脂菊と冬らしい静かな取り合わせだが、花器のお陰で足元がしっかり支えられて温かみも感じられ、長い間飾っておくことも出来た。

花器が美しいと花との接点も気をつかう。

祖父も足元には焦茶色に合う綺麗な色の花を置いていた。

椿の葉が多くかかり過ぎないように、重くならないように何度もカメラのレンズを覗いた。

花材　小豆柳（柳科）
　　椿（椿科）
　　スプレー菊（菊科）
花器　方形陶花器

立派な金魚草

櫻子

10月の関東支部いけばな展で、いろんな色の金魚草を主材にしていけておられる人がいたが、細い横長の花器の口から舞出るような金魚草が印象的だった。さて、京都の花屋でも見事な金魚草が売られていたので私もいけてみることにした。12月初旬にこんな金魚草が手に入ることを覚えておこう。

作例では黒地に銀と金で彩色された箱形の陶花器に濃赤色と純白の金魚草を立て、足元に大輪のダリアを添えて花器の口元を整えた。花器の模様を隠したくないので、ダリアを短く挿しただけで、余計な葉ものは加えていない。

金魚草で思い出すのは、「花ふたり旅」の本の中で、母がドイツのケルンでいけた花。赤色、臙脂色、オレンジ色の金魚草に白色とクリーム色のストックを混ぜていけられている。器は葉でつくられたリースでこれも又濃い臙脂色なのだが、ブロンズのモニュメントの前でそれらの強烈な色彩がとてもよく合っている。この感覚は流石だと思う。異国の地で限られたスケジュールの中、場所を探し、花と器を手に入れて写真に撮るのは至難の業。「花ふたり旅」は両親の宝物であり、また私たちみんなの宝物だ。両親に感謝。

花材　金魚草（胡麻葉草科）
　　ダリア（菊科）
花器　金銀彩箱形陶花器

耳付花器

櫻子

花器に耳が付いているのと付いていないのとでは、何がどう違うのだろう。

今月号には二つの耳付花器に花をいけている。どちらも絶妙なバランスで耳が付いている。見ていて飽きない。器によっては、耳が無いほうがシンプルでいいのになと思うような耳がとってつけたように付けられた器もある。器の耳は奥が深い。

耳の役割は装飾性にあると思う。耳の雰囲気が器の印象を決定づけると言ってもいい。

このページの花器のように、付けられた耳がお洒落な形だと、花の取り合わせや花型も垢抜(あかぬ)けた感じになる。また、表紙の花器のように獣の顔の耳がついていたりすると、格調高い雰囲気が要求される。知らず知らずのうちに、器の耳が私たちのいける花に影響を与えているとすると、耳おそるべしだ。

というわけで、チョコレート色のカラーと深紅のレナンセラ、白い実の南京櫨(なんきんはぜ)という取り合わせには、きっとこの花器が合うと思っていけてみると、やっぱりいけ映えがする。きゅっと締まった足のくびれが、花型に動きを与えてくれている。そして腰に手を当てたような形の耳は、全体の引き締め役だ。

花材　南京櫨（燈台草科）
　　チョコレート色のカラー（里芋科）
　　レナンセラ（蘭科）
　　ミリオクラダス（百合科）
花器　耳付陶コンポート（宇野仁松作）

桑原専慶流いけばなテキスト607号　2014年1月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五二五円　http://www.kuwaharasenkei.com

出合い花（4）

仙溪

バンダと金豆（きんず）

花屋で可愛い黄色の実を見つけた。小さな鉢植で売られていたが、名前は「金豆（キンズ）」となっている。

調べると和名はマメキンカンで、別名としてキンズ、又はヒメキンカンと呼ばれているそうだ。

蜜柑（みかん）科・金柑（きんかん）属の常緑低木で原産地は中国。食用にはならず、盆栽などの観賞用に栽培されている。やはり枝には棘がある。

今月号には表紙にも蜜柑科・蜜柑属の仏手柑をいけている。こちらも鉢植から切ったのだが、仏手柑の棘は強烈なので注意のこと。下手をすると手に穴が開く。

さて、出合い花。金豆1本に何を取り合わせようか。花屋を見てまわってこのバンダに決めた。直感である。いけてみてやはりよく合っていると思う。紫色のバンダは仏手柑との相性もいい。反対色の取り合わせが互いの色を引き立て合うのだろう。

バンダは東南アジアを中心として中国南部～オーストラリアにおよそ60種が分布する蘭の仲間。樹木や岩肌に根を張り付かせて伸びる。名前はサンスクリット語で「着生する・まとわりつく」と言う意味の「バンダカ」に由来する。

まとわりついたり、からみついたり、植物たちも大変だが、人間も含めて自然はもともと複雑にからまりあってあると思えば、様々な出合いでこの世は成り立っているとも言える。次なる出合いは。

花材　バンダ（蘭科）金豆（蜜柑科）
花器　珠形陶花瓶（宇野仁松作）

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2014年
2月号
No.608

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

四君子

＜表紙の花・3頁の花＞　仙溪

この二作の小品投入はどちらも季節の花木に蘭を取り合わせている。東アジアの木と東南アジアの蘭の組み合わせだ。

梅と蘭といえば「四君子（しくんし）」が思い当たる。四君子とは、蘭、竹、菊、梅の四種を、草木の中の君子として称えた言葉である。

君子は徳と学識、礼儀を備える。蘭、竹、菊、梅はその姿や性質から高い気品が感じられるため、中国宋代以降の絵の画題にされることも多い。また、この四種の草木を描くことで基本的な筆遣いすべてが身につくと言われている。

四君子として描かれる蘭は春蘭で、清楚でよい香りのする小輪の蘭である。しかし、作例の胡蝶蘭もバンダも、それぞれに美しい品格を備えている。孤高な凛とした強さが感じられる。それゆえに、梅や蠟梅のように香り高い気品ある花木との相性がよいのだと思う。

厳しい寒さの中で咲く梅や蠟梅に蘭をあわせると文人趣味を感じるいけばなになり、同じ蘭と春の桜の組み合わせでは、優しい華やぎが感じられる。

二作とも撮影のあと、冨春軒初春の会で座敷に飾った。新年の言祝ぎの場によく合っていた。

＜表紙の花＞
花材　蝋梅（蠟梅・臘梅）
（蝋梅科）
ミニ胡蝶蘭（蘭科）
ミリオクラダス（百合科）
花器　陶花瓶（竹内眞三郎作）

＜3頁の花＞
花材　紅梅（薔薇科）
バンダ（蘭科）
ミリオクラダス（百合科）
花器　陶花瓶（竹内眞三郎作）

古清水の器

＜2頁の花＞　櫻子

松竹梅の舟鉢に蘭（オンシジウム・オブリザタム）とシクラメンをいけた。

この器は古清水（こきよみず）写しの器。古清水とは江戸時代前期に確立された焼きものである。清水焼に磁器が登場する幕末期以前の焼きものをこのように呼んでいた。

京焼の野々村仁清（にんせい）を起源とし、優雅で美しく、その当時のお公家さんの好みや宮廷文化の影響がある。それまでは茶道文化の影響で侘び寂び的な焼きものが多かったこともあって、華やかなものへの要望も強く、色絵や絵付けの美しい器が作られている。

京焼清水焼は今も同じ技術で引き継がれ次の世代も育っている。

花材　オンシジウム・オブリザタム
（蘭科）
シクラメン二種（桜草科）
花器　古清水舟鉢

散歩道

岡山県倉敷市の美観地区は観光客が多く訪れる人気のスポットだ。

倉敷にはよく行くので、時間が空けばぶらぶらと散歩を楽しんでいる。

ゆっくり時間があれば、大原美術館や児島虎次郎記念館で芸術に触れるのがいい。児島虎次郎の油絵は温かな優しさがあって心が癒やされる。

時間があまりない時は美観地区の北側の倉敷本通りを往復してから駅まで歩く。最近通りが整備されて、夜は灯りの演出も素敵である。

歩いていると、ある家の外壁から何やら見つめられている気配を感じた。それは手作りのいけばなの額であった。木枠に陶器の花器が固定されて、椿が一輪いけてある。遊び心が洒落ている

銀色に輝いて

〈4頁の花〉　櫻子

日を増す毎に花芽が大きくなり銀色に輝いてきた。初春の会での迎え花にいけた赤芽柳と薔薇、胡蝶蘭の盛花。赤芽柳は20本だが、枝分れも数えると40本ほどになると思う。

三彩釉の水盤は、花材を沢山用意していけ終えても、足りないかな?と思うくらい大らかに包み込むような大きな器だ。清水保孝さんの作品だが、花器として作られたのだろうか。それとも大鉢だろうか。私としてはいつも沢山の本数が挿せて有り難いと思って花をいけさせて頂いている。

狂言の中の立花　仙溪

「真奪」しんばい

作者　不詳
場所　京都東山（大蔵流）
　　京都深草（和泉流）

■あらすじ

シテ（主役）は太郎冠者、アド（脇役）は主人と通りがかりの男である。

主人と太郎冠者は、立花に使う真（中心となる枝）を取りに出かけ、良い真を持った男に路上で偶然出会う。

太郎冠者は男の真を奪うが、逆に主人の太刀を奪われてしまう。

主従は男を待ち伏せして捕まえるが、太郎冠者は男を縛る縄を悠々と綯い、その上あやまって主人を縄で縛ってしまう。「ぬすびとを見て縄をなふ」ということわざを舞台化した趣向。

「真奪」の時代背景

室町時代のたてばな

立花に使う真を取りに出かける、とあるが、狂言が成立した室町時代にはまだ立花とは言わずに「たてばな」と呼ばれるシンプルな様式であった。たてばなは真を中心に立てた足元に何種類かの下草を加えて構成される。

室町時代に、はたしてたてばなの真を取りに山へ出かけるということが一般的だったのだろうか。東京富士大学教授・網本尚子さんの「狂言に描かれた花『真奪』の考察を中心として」を参考にして、室町時代の花事情をのぞいてみる。

室町時代において、現在の生け花の源流にあたる立花（たてばな）が流行していたことはよく知られている。しかし、狂言でたてばなを題材とした作品は、実は「真奪」一曲しかない。

室町時代には、前代の寝殿造りが変化発展し、書院造りという建築様式が成立する。書院作りの中心は書院で、ここが対面所となるのだが、書院の主室の上段の間の背後には押板、違棚、付書院などが設けられた。

押板には三幅対の画幅が掛けられ、その前にはお供えするように三具足（香炉・花瓶・燭台）を置き、その左右に一対の花を立てた。また、違棚には上段・中段・下段ごとに、小花瓶を置いたり、口の広い花器を置いたりと、工夫をこらした花の立て方がされ、付書院には小花瓶を置いたり、釣花瓶や柱花瓶を置いたり、かなり自由に立てていたようである。この中で中心となり、最も重んじられたのは、三具足の花であった。

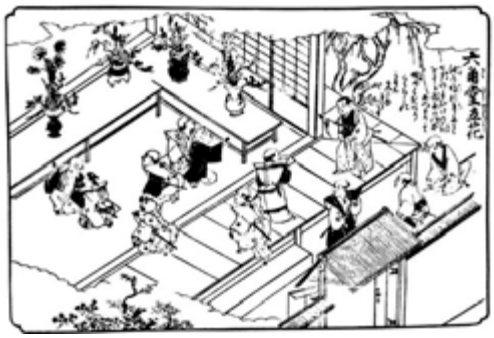
このようなたてばなを定着させたのは、将軍側近の同朋衆であったと考えられている。

同朋衆は将軍家の座敷を唐物の花瓶や書画、工芸品で飾る「座敷飾り」や諸芸能に従事した特別技能者たちをいう。

三代将軍足利義満の頃から花の御所や北山殿で、七夕法楽として仏教的行事の中で花を立てることが盛んに行われるようになり、同朋衆の立阿弥や能阿弥といった花の名手があらわれる。

また公家においても七夕法楽花会（花合）が行われ、山科家の雑掌である大沢久守、六角堂頂法寺の池坊専慶らが花会で花を立て、評判となる。

その後、一六世紀前半には、文阿弥（二世）が「文阿弥花伝書」を、池坊専応が「池坊専応口伝」という書を残し、たてばなの理論、様式の基礎を確立した。



「宝永花洛細見図」六角堂立花会
江戸時代前期頃の立花会の様子

さて、室町時代に立花の初期の姿である「たてばな」が武家や貴族の間で立てられていたのは間違いないだろう。七夕法楽花会（または花合）で飾られたたてばなはすぐには撤収されずに、近隣の人々も観賞することができたそうで、人々の関心もそこそこあったことが想像できる。

庶民の中でも富裕層の間では自分の家で座敷飾りを楽しむ者もあったのではないだろうか。花を立て、花瓶とともに観賞する立花の会も行われていたかもしれない。網本さんは次のように推測している。

虎明本には「此間は立花がはやって、各のまはり花をなさるるが」というセリフがある。茶道の七事式に花を客が順々に生ける「回り花」というのがあるが、七事式は一七〇〇年代半ばに定められたものなので、ここは七事式の回り花のことではないだろう。

狂言では連歌の会の出てくる曲が多いが、たとえば「千切木」でアドの「あたりの若い衆と寄り合うて、連歌の初心講を取り結んでござれば、すなわち頭に当たってござる」というセリフや、「連歌盗人」でシテが「初心講を結んで、近日連歌の当に当たっては御座れども、身上不如意に御座って、この当を勤めう手段が御座らぬ」というセリフからもわかるように、当時の連歌会では、頭を持ち回りで担当していたようである。これと同じく、虎明本の「まはり花」も、酒宴の準備をしたりする当番や会場の提供を持ち回りでやる花の会、というくらいの意味だったのではないだろうか。したがって、「真奪」で述べられている立花の会とは、各自の家を持ち回りの会場として、花を立て観賞する会であると推測しておきたい。引用おわり

現代では「いけばな展」が様々な会場で催されている。一度に多くの花をいけて、多くの人に見てもらうわけだが、あまり多くのいけばなが並ぶと、じっくりゆっくり味わってもらえているだろうかと思ったりもする。

室町時代のように、自分の足で花材を探してくる時代ではない。いい花屋さんにはいい花材が売られている。でもそこにやってくるまでには、自分の知らないところで、大変な手間と苦労がなされているわけで、そんな花材でいけた花なら、時間をかけて見てもらいたいし、その花を肴にわいわいと友と語るような場面もあったらいいなと思う。

浄瑠璃、能、狂言と、古の花文化を垣間見てきたが、現代においていけばなを文学で表現する人はないものだろうか。劇になるならどんな物語だろう。あなたにはどんな花のドラマがありますか？

除真（のきしん）の立花

仙溪

赤松と五葉松を真と請に使った立花。副、見越、流枝に朱木瓜、控枝と前置に椿二種、正真に白菊、胴には五葉松。あしらいに寒菊の開花をのぞかせた。

この花形は真が中程から斜めに出る「除真」で、こういうのを「行の花形」と呼ぶ。本勝手では真が左に出るので、右に出る場合は「逆勝手」ということになる。

「除真行の花形逆勝手」となる。

この立花は「富春軒初春の会」で立てたもので、蘇東坡の「赤壁の賦」という漢詩の屏風の前に飾った。屏風の幅にあわせて、流枝を長めにだしている。

花器は父が好んで使った森野泰明氏の陶花器「雲藍條文花器」。父の思い出がいっぱい詰まった大切な器だ。

直真（すぐしん）の立花

挿花　和田慶千
解説　仙溪

黒松の若木（若松）を真に。請に白梅、副に紅梅、見越に蝋梅（臘梅、蠟梅）。正真に黄菊、控枝に白玉椿、流枝に苔梅。胴に三光松、前置に赤松が使われている。あしらいに薮椿。

この花形は真が中心に真っ直ぐ立つ「直真」で、こういうのを「真の花形」と呼ぶ。副が左に出ているので本勝手である。

「直真真の花形本勝手」となる。

この立花は「冨春軒初春の会」で立てていただいたもので、今後も「初春の会」には立花研修会の先生に、お迎えの花として立てていただこうと思う。

花器は小川欣二氏の陶花器「追想花瓶」。先の立花研修発表会で岩田慶寿先生が使われていた。

若松を中心に、紅白の梅の対比が見せ場になっている。

水仙一色（いっしき）の立花

挿花　横田慶重
解説　仙溪

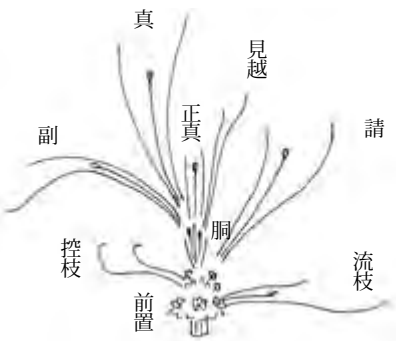
水仙だけで殆どの役枝をいれる立花を「水仙一色」と呼ぶ。

この花形は真が中程から斜めに出る「除真」で、「行の花形」と呼ぶ。真が左に出るので「本勝手」ということになる。

「水仙一色除真行の花形本勝手」となる。

この立花も「冨春軒初春の会」で立てていただいたもの。

花器は幾佐田（きさだ）昌宏氏の陶花器「紫紅彩花瓶」。赤色濃淡の小菊との映りがはんなりとしている。



桑原専慶流いけばなテキスト608号　2014年2月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五二五円　http://www.kuwaharasenkei.com

いけばなのドラマ　仙溪

8頁の最後にいけばなのドラマと書いて思い出したことがある。以前、金沢で若手華道家が企画したいけばなの祭典で、子供作文コンクールの授賞式を行った。作文のテーマは「花」で、たくさんの花にまつわる体験談が寄せられていた。入賞者の作文を読むと、そこには様々なドラマがあり、どれも花が大切な役割をもっていた。読むうちに涙がこみあげてくるものばかり。子供の感受性は大人達よりも繊細で豊かだ。花に対して新鮮な気持ちを忘れずにいたいと思う。

出会い花（5）　仙溪

クリスマスローズ　薮柑子（やぶこうじ）

小さな鉢植で売られている草花で、いつもとひと味違ったいけばなを、という狙いでいけてみた。

クリスマスローズは金鳳花（きんぽうげ）科・ヘレボルス属の多年草。多くは東ヨーロッパ、バルカン半島、トルコ、シリアに自生する。ある種がクリスマス頃に咲くのでこの名があるが、殆どは春に咲く。花に見えるのは萼なので、散らずに長く楽しめる。

薮柑子は薮柑子科・薮柑子属の常緑低木。東アジア一帯に分布する。万葉集では「山橘（やまたちばな）」の名で読まれている。

今回は湯呑に直立させてみた。こうするとクリスマスローズも姿をはっきり見せられる。湯呑みの作者は右が清水卯一（しみずういち）氏、左が清水保孝（やすたか）氏。お二人は親子でいらっしゃる。湯呑みの中心から立つようにしたので、水際が美しい。丸盆で一つに。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2014年
3月号
No.609

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

花器　白色陶鉢

雪の中で

＜表紙の花＞　櫻子

今年の立春は、前日に比べて急に気温が下がって真冬の寒さが戻ってきた。

その週末の岡山行きの新幹線は、京都の雪も溶けていたので、安心して乗り込むと姫路辺りから雪景色になってきて、相生、岡山と雪は降り続く。

いつもなら京都に雪が積もっていても、晴れている土地なのに。珍しい風景に何度も写真を撮った。岡山駅に着くと改札辺りは大混乱、電車の発着も大幅に遅れていた。

2月は結局3週間近く寒い日が続いた。

1月の下旬にいけた雪柳とチューリップの盛花は、春の温かな兆しを感じるようにといけたのに、まるで雪の中で咲いているようだ。

少しでも花が開くように雪柳の足元を割って、皮を削って枝を少し短めにして剣山に挿し直している。そうすることで再び寒い日がやって来ても最後まで力強く咲いてくれる。

雪の中でタクシーを長い間待ち続けて、やっと稽古場にたどり着いた。

今そんな事を思い出しながら、この花の原稿を書いている。

花材　雪柳（薔薇科）
　　チューリップ（百合科）
　　プリムラ・ポリアンサ
　　（桜草科）

器の選択

＜2頁の花＞　櫻子

連翹（れんぎょう）の花を見ていると、春のやわらかで温かな日射しを感じる。オレンジ色の立派な薔薇（ばら）を取り合わせて、アンスリウムの小葉でみどりを足した。

いけばなで最も大きなウエートをしめるものに器がある。いい花材で、いい取り合わせで、いけ方にも工夫があるのに、何かハッとする感動がない場合は、器の選択が良くないことが多いように思う。

逆にとてもシンプルないけばななのに、なにか心に残る趣がある場合は、器の選び方が抜群だったりする。

いけばなの印象は器によって左右されると言ってもいい。

いける技術を磨く一方で、もっといける器についても研究する必要がありそうだ。

この三月に、京都のやきものの窯元との企画イベントがある。魅力的な器に出合えるように、互いにいい刺激になればと思っている。

花材　連翹（木犀科）
　　薔薇（薔薇科）
　　アンスリウムの葉（里芋科）
花器　格子柄陶花器

早春の投入

〈3頁の花〉　仙溪

李（すもも）の苔枝に赤と薄紅色の椿を取り合わせた投入。

李の枝には小さな白い花がところどころに咲きはじめている。

枝自体には華やかさや瑞々しさはないけれど、独特の自然味を感じる。味わいのある枝だ。

取り合わせを悩んだが、葉の照りが美しい二色の椿だけを選んだ。赤色濃淡の花色は艶やかに春の訪れを告げてくれる。椿の厚い葉は白い苔と対照的な生命力を見せて、互いに個性を強め合っている。いい取り合わせだと思う。

花器には濃い茶色の釉薬がかかった下蕪（しもかぶら）型の花瓶を選んだ。

花器の選び方によって、同じ花でも華やかになったり、雅趣（がしゅ）を感じる花になったりする。父や母の器選びを思い出しながら、最近少しずつ納得のいく選択ができるようになったが、それでも時々後悔することもある。他人の意見を聞くのも大切で、櫻子はよく的確にアドバイスをしてくれる。

花をいけた後で、ゆっくりながめていると、いろんな思いがわいてくる。春の訪れを告げる木のまわりで、小鳥たちが遊んでいるようだ。

花材　李（すもも）（薔薇科）
　　椿二種（椿科）
花器　焦茶色下蕪花瓶

出会い花（6）　仙溪

啓翁桜　菜の花

「いけばなのルーツは？」と問われたら何と答えますか。中国から伝わった仏花。神の依り代。室町時代の立て花。江戸時代に生まれた生花。など、どれも現在のいけばなに繋がる大切なルーツであるけれど、いけばなが「器に花をいけて楽しむ」ことであるなら、そのルーツは平安時代の宮中に見つけることができる。

清少納言の「枕草子」には、次のような描写がある。

おもしろく咲きたる桜を長く折りて、大きなる瓶にさしたるこそをかしけれ。桜の直衣に出袿して、まらうどにもあれ、御兄の君たちにても、そこ近くゐて物などうち言ひたる、いとをかし。（第4段より）

高欄（勾欄）のもとに青き瓶の大きなるすゑて、桜のいみじうおもしろき枝の五尺ばかりなるを、いと多くさしたれば、高欄の外まで咲きこぼれたる（第23段より）

花をいけて心豊かに暮らすことのルーツは、平安時代の貴族の間で、ごく自然におこなわれていたと思われる。様式や型の伝承はもちろん大切だけれど、器に挿した花のいきい

きとした美しさを愛でる心こそ大切に伝えてゆきたい。

そんなことを思って、ごく自然体で季節の枝と花を器に挿してみた。大きな青い瓶ではないが、繊細な赤と青の酒器にそれぞれ1本ずつ、啓翁桜と菜の花を挿している。

花屋で気に入った花を買って帰り、似合う器に挿してみる。置き場所も考えて。現代の「いとをかし（とても趣がある）」をいけてみよう。

掛け花

＜5頁の花＞

新鮮な花を数本いけるだけで、部屋の雰囲気がずいぶんと和む。それが季節の花ならなおさらいい。

家の玄関には常に掛け花をいけているが、お越しになった人が最初に目にするいけばなということもあって、小さいながらも気を遣う。

美しい葉、初々しい花で、季節の煌めきを感じてもらえるようにとの思いを込めていけている。さりげない花にこそ、いけばなの心と技は現れる。日頃の稽古の積み重ねが大事。

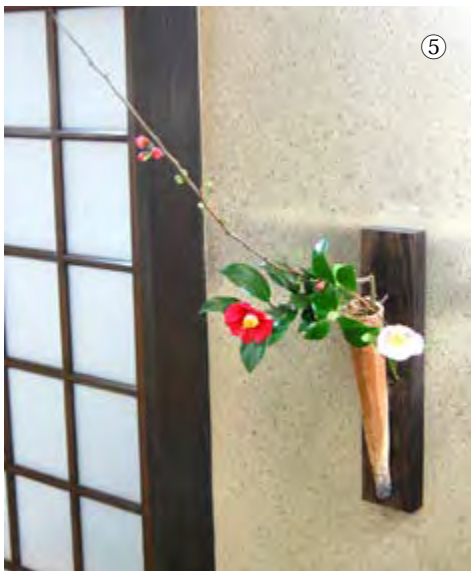
①白梅、南天の葉と実。
②出雲天社薮椿、枝垂柳。
③椿（紅白絞り小輪）。
④白椿、南天の実。
⑤朱木瓜、赤椿、白椿。

①

②

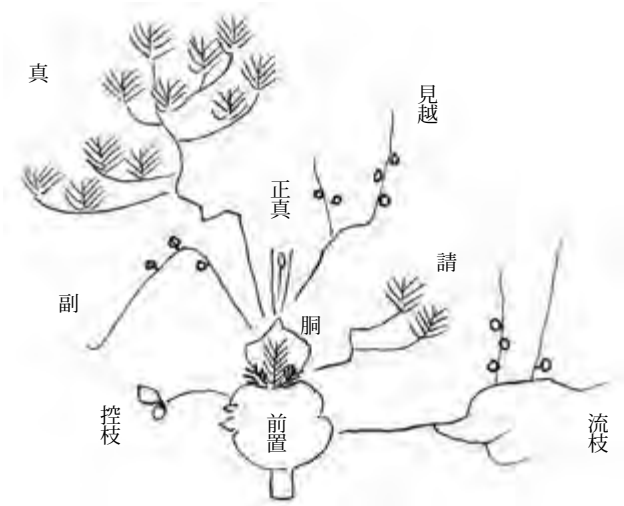
③

④


⑤

第35回 京都名流いけばな展　会期　2月11日(火)～16日(日)　会場　JR京都駅新幹線コンコース

桑原仙溪　立花　行の花形　赤松　五葉松　木瓜　椿　水仙　花器　青銅立花瓶



桃　＜9頁の花＞　仙溪

花型　草型　副流し

花器　煤竹竹筒

桃

＜9頁の花＞　仙溪

花型　草型　副流し
花器　煤竹竹筒

三月三日は桃の節句。清少納言の「枕草子」には次のように書かれている。

三月三日は、うらうらとのどかに照りたる。桃の花の今咲きはじむる。

旧暦からおよそ一ヶ月ずれた現在の三月初旬では桃はまだ固い蕾だが、平安時代には温かな日射しの中で微笑むように咲き始めていたようだ。桃の花が開くことになんともいえない風情を感じる心は、きっと昔も今も変わらない。桃園はなくても、いけばなで花を楽しむことができる。桃の花を愛でて、古（いにしえ）の暮らしに思いを馳せるのも、いとをかし。

早春の定番

＜10頁の花＞　仙溪

花もの花材を三種類組み合わせた早春定番の盛花。チューリップと

スイートピーは色んな花色があるので、色の組み合わせ方を変えると雰囲気も変わる。チューリップと菜の花は伸びてくるので時々いけ直すといい。スイートピーは花持ちがずいぶん良くなった。

花材　チューリップ（百合科）
　　菜の花（油菜科）
　　スイートピー（豆科）
花器　トルコブルー陶花器

白花桃　薊

〈11頁の花〉　仙溪

花屋で満開になった白花の花桃を見つけたので、深紅の薊（あざみ）を合わせて、大好きな手付花器にいけた。いい花材に巡り合ったら、とっておきの器にいけて楽しみたい。

花器の底にゴム敷きを敷いて砂利（小石）を深さの三分の一くらい入れて平らにし、その上に大きな剣山を置いていけている。器を考えたり、いけ方を工夫するなど、手間を惜しまないことが、花材の品格に対する礼儀だと思う。

薊は水揚げが難しいが、切り花にはよく持つ品種がある。桃は花の中に芋虫がいることがあるので、見つけてはピンセットで退治する。

花材　花桃（薔薇科）
　　薊（菊科）
花器　手付陶コンポート

桑原専慶流いけばなテキスト609号　2014年3月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五二五円　http://www.kuwaharasenkei.com

白花満作

櫻子

糸状の白い花が枝の先端に無数に集まってブラシのような形をしている。初めて出会う不思議な花なので、葉の出ていない枝の姿をそのまま見せるように、小さな花の黒百合を取り合わせ、足元に庭から蕗の薹を切ってきて加えた。小さな蕗の葉も入れている。

花屋では穂咲満作と呼んでいたが、一般には白花満作、もしくはフォザギラ・マヨールと呼ばれている。

北アメリカ原産の落葉低木で、春に咲く白い花は花弁ではなく雄しべである。花は甘い香りがする。花に少し遅れて出る葉は、秋に美しく紅葉するらしい。

日本の林に咲く一人静に花の感じが似ている。日本の野の花と合わせても違和感がなさそうだ。白花満作はアメリカのどんなところに咲くのだろう。そこにはどんな動物がいるんだろう。鳥の鳴き声。風の音。想像をふくらませて、花の故郷に思いを馳せるのも楽しい。

花材　白花満作（満作科）
　　黒百合（百合科）
　　蕗の薹（菊科）
花器　水色ガラスコンポート

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2014年
4月号
No.610

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

花は自分そのもの

〈表紙の花〉　櫻子

「いけた花は自分そのもの」。私はいつもそう思って花をいけている。

そんなふうに思えば、いけたあとも水をかえ、いけ直し、短くなっても最後まで世話をするようになる。花に対する敬意と愛情を大切にしたい。

客観的に見ても、花を選び器を選んでいけた花には、いけた人の好みや内面が表れる。皆さんにも自分の好きな色の組みあわせみたいなものがあるだろう。ご自分で花を買っていけた花は貴方そのものだ。

表紙の青麦とアネモネの盛花も、赤色のクロトンを選んだ時点で、アネモネは赤色だけにして器は白がいいなと直感した。赤い花と葉から伸びる青麦の柔らかな緑が目に優しい。自分にこんな雰囲気があったのかと驚いたが、これもまた私の花なんだと愛着が湧いてくる。

花材　青麦（稲科）　アネモネ（金鳳花科）
　　クロトン（燈台草科）
花器　帽子型陶水盤（ドイツ製）

木製の器

〈2頁の花〉　櫻子

生活用具として作られた民芸品も花器として使うと花を引き立ててくれて、又郷土的な面白さも加えてくれる。祖父が何度も花生けに使っていた中に韓国製の木鉢があった。

米を選別する器で、側面に段々の刻みこみがあって、この器に米を入れ、振りながら選別する器具で、農具のうちの一つである。

材質は松の木のようだ。長い間仕舞いこまれ

ていた。古くて素朴すぎるので、両親は使わなかったんだろうか。私は思い出の器として、又使っていきたいと思う。

陶の水盤を入れて剣山を使い、ミモザアカシアとチューリップ、スイートピーをいけた。畑で育った健康的な花なら調和すると思う。

たっぷりとした容器なので、大きく派手に咲く花も受けとめてくれる。パーロット咲き（オウム咲き）のチューリップもミモザアカシアも軸が太く、長い間きれいに咲き続けてくれた。

花材　ミモザアカシア（豆科）
　　チューリップ（百合科）
　　スイートピー（豆科）
花器　木製鉢（韓国製）

桜　アイリス　椿

＜3頁の花＞　仙溪

父が「燦陽会」と名づけた研究会がある。月一回、岡山の先生方が研鑽のため家元へ来られて二作稽古して帰られる。毎回、花フジが特別に花材を仕入れてくれる。

作例の桜とアイリスの投入は2月下旬の燦陽会の見本にいけた花で、伸びやかな桜の枝を前方へ張り出して、その後ろに2色のアイリスをのぞかせ、椿で口元を引き締めている。椿は深紅小輪の出雲大社薮椿で、父が好きだった椿だ。白花のアイリスが満開前の桜の花色を助けてくれている。

アイリス（ダッチアイリス）はオランダで作られた花だが、日本の桜や中国原産の梅や桃とも相性がいい。薔薇科の花木と菖蒲科の花の組み合わせで色んなバリエーションが考えられる。

花材　桜（薔薇科）　アイリス（菖蒲科）
　　出雲大社薮椿（椿科）
花器　赤銅色陶花器

除真（のきしん）　白梅の立花

仙溪

花型　行の花形
花器　耳付青緑釉コンポート

日本いけばな懇話会「梅の花会」に出品した立花。会期中残念ながら花は咲かなかったが、その後家で咲き、長い間甘い香りを楽しめた。

苔のまわった老梅で幹はごつごつとしている。梅は撓めがきくはずなのだが、最初に撓めた枝は簡単に分離してしまった。あまりのショックに呆然とする。気を取り直して作戦変更。自然の分かれ枝をそのまま使うことにした。元々大きな1本の枝から7つの役枝を作っている。

花会では様々な流派の先生方の梅のいけばなを拝見でき、とても勉強になった。他流に引けを取らない花材を提供してくれた花屋の気概に、なんとか応えなくては。技量不足を感じつつ、老梅に敬意と感謝を。

流枝会立花研究発表会

桑原専慶流華老の上野淳泉先生が指導する立花研究会「流枝会」の発表会に、家元を含む二十作の立花が立てられたのでここでご紹介します。

大作のために器を作るところから始めた人、この日のために松を育てていた人、山を巡ってイメージを膨らませた人、それぞれに思いのこもった立花は見応えがあった。

桑原仙溪　（写真①）

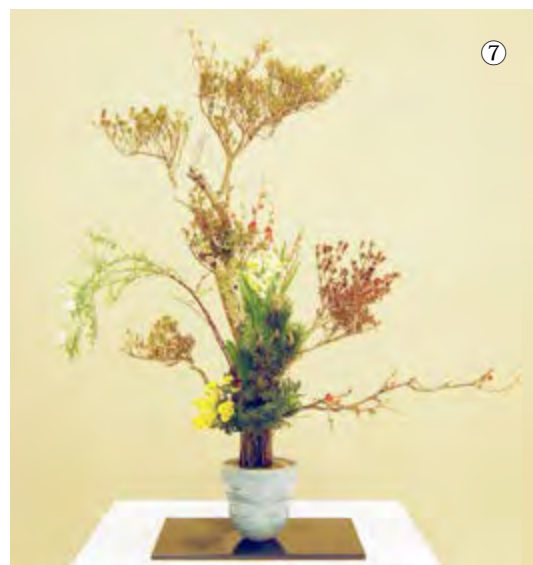
花材　苔梅　椿　水仙　葉蘭

④

⑥

⑤

⑧

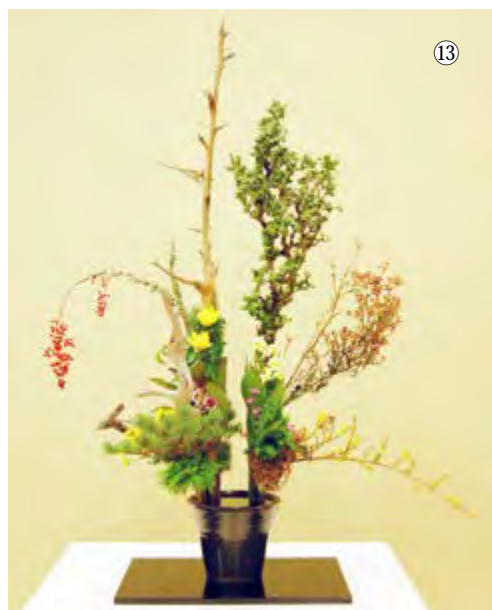

⑦

⑩

⑨

⑫

⑪


⑬

⑭

⑯

⑮

⑱

⑰

⑳

⑲

小手毬　チューリップ

<9頁の花>　仙溪

花型　生花　株分け

花器　飴色陶水盤

小手毬　チューリップ

＜9頁の花＞　仙溪

花型　生花　株分け
花器　飴色陶水盤

小手毬の枝がつくる曲線には独特の美しさがある。白い手毬が跳ねてくるような動き。前方へ垂らすとまるで白い花の滝だ。

そんな小手毬は生花でいけるとなかなか難しい。あまり撓めがきかないので枝振り次第である。大きめの水盤に赤いチューリップと株分けにした。小手毬の分かれ枝は互いに絡めたりしながらできるだけ生かすようにしている。

花の気品

＜10頁の花＞　櫻子

スカビオサ（松虫草科）にはいろんな色がある。私が選んだのはワインレッドのスカビオサ。静かに人を惹きつける魅力がある。なんて綺麗な花なんだろう。風格と気品も感じられる。とり合わせには同系色の大輪の薔薇（薔薇科）とライラック（木犀科）を選び、淡いブルーと白のベネチアン・レース・グラスにいけた。

薔薇もライラックも思い切って短くいけ、スカビオサを主役にしている。気品のある花をいける場合は、それに見合う品格の高い器を選びたい。

花器　ベネチアン・レース・グラス

白と黒の器

＜11頁の花＞　仙溪

今月号には白と黒の器が3つ使われているが、3作とも赤い花をいけている。白い面の多い器と黒い面の多い器。無意識のうちに花に合う器をそれぞれに選んでいるようだ。

作例のシンピジウム（蘭科）はかなり重たいので安定のいい器でないとひっくりかえる。花の茎に丈夫な添え木を括り付け、器の底に剣山を置いていけている。アンスリウム（里芋科）の赤黒い花と茶色い葉を合わせたが、花器の網目模様が花の重みを和らげてくれた。

花器　白黒花器（竹内眞三郎作）

桑原専慶流いけばなテキスト610号　2014年4月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

出合い花（7）　仙溪

ガイミアリリー
アネモネ

去年9月号でいけたガイミアリリーが咲いたあと捨てずにいたのだが、乾燥してもなお強さが失われていないので、出合い花に使うことにした。朽ちた植物の横で新たな命を咲かせる花。そんなイメージでアネモネを一輪出合わせた。ガイミアリリーの枯れ花は花器に立てた支柱に固定している。アネモネは鉢植から花と葉を切っていけている。

花材　ガイミアリリー（竜舌蘭科）
　　アネモネ（金鳳花科）
花器　掻き落とし陶花瓶

レモンちゃん

すっかり家中を探検しつくしたレモンちゃん。つくばいの水の音を聞きながら庭を眺めるの図。

【追伸】先月号の出合い花で使った赤と青の酒器は森野彰人作。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2014年
5月号
No.611

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

大輪のクレマチス

＜表紙の花＞　櫻子

クレマチスと呼ぶと洋花。鉄線と呼ぶと和花。呼び方で洋と和にイメージが変わるけれど、やはり私は鉄線と呼んでしまう。

日本や中国では大輪の鉄線を鉢に仕立てて鑑賞する事が多いが、ヨーロッパ原産のクレマチスやその交配種は家の壁に這わせたりアーチに絡めたりと随分景色も変わる。どちらもそれぞれに鉄線の優しい姿が表れて美しいと思う。

この花も満天星（どうだんつつじ）の枝に絡ませて広げたり下げたりして鉄線の自由にさせていけてみた。

花材　満天星（燈台躑躅・躑躅（つつじ）科）
　　鉄線（金鳳花（きんぽうげ）科）
花器　長首陶花瓶

オクロレウカ
エピデンドラム

＜2頁の花＞　仙溪

爽やかな色彩を感じる盛花。水際の繁みがない分、水面を広く見せられて気持ちがいい。ただし、剣山は小石で隠すこと。

花器の色や形にもよるが、器の口元まで水をいっぱいに入れると、それだけで清らかな谷川の空気を感じることがある。焼き物の元は土だか

らかもしれない。花器に水を満たした瞬間から、自然との接点がすでに生まれている。

オクロレウカの花は茎の先端と途中にも咲く。二度目の花も咲くので長い間楽しめる。頻繁にポンプで水換えをしよう。

花材　オクロレウカ（菖蒲（あやめ）科）
　　エピデンドラム（蘭科）
花器　灰色釉陶水盤

ポインセチアの仲間

＜3頁の花＞　櫻子

枝だけのような植物はミルクブッシュと言ってトウダイグサ科・ユーフォルビア属で、ポインセチアの仲間であり多肉質の枝を持つ。

茎に傷をつけるとそこから白いミルクのような樹液を出すのもポインセチアと同じだ。緑色の茎が多いが、今回のものは優しいピンク色をしていた。

同じような形で立ち上がっているのはアンスリウムの蕾。二種ともユニークな姿で先が尖っている。

海中深くピンク珊瑚の間を魚が自由に泳ぐような景色を思い浮かべて。

花材　ミルクブッシュ（燈台草科）
　　アンスリウム（里芋科）
　　ミリオクラダス（百合科）
花器　御影石花器

生花

ユーカリ　薔薇

仙溪

花型　二種挿し　草型　副流し

花器　陶コンポート

現代的な花材での生花の作例。

ユーカリはオーストラリア原産のフトモモ科ユーカリ属の常緑樹。５００～６００種類があり、多くが高木になる。

現在世界で最も高い樹木は北アメリカ・カリフォルニアのセコイアで、樹高１１５ｍ余り。とてつもなく背が高いが、過去にはなんとユーカリが世界一高い木だったそうだ。オーストラリア・ビクトリア州のユーカリの仲間、マウンテンアッシュの１３２ｍ余り。この木は元々１５２ｍあったという非公式の記録もある。まさに天を突く高さだ。ちなみに京都タワーでも１３１ｍである。

ユーカリをいけながら空高くそびえる木を想像するのも楽しい。根締めには小輪の薔薇を選んだ。

立華時勢粧を読む　①

今月号より、「立華時勢粧」（貞享5年、1688年）について、そこに書かれていることを紹介してゆく。ただし江戸時代前期の木版刷りで、字体は草書体である。間違った読み方や解釈をした時はご指摘をいただきたい。また理解しやすくするために旧字は常用漢字に置き換えることにする。

「立華時勢粧」は富春軒仙溪による8冊からなる花伝書で、その内容は次のようになっている。

巻一　「立花時勢粧　上」

立花時勢粧序
真行草の図（33図）
真の花形（一図）
行の花形（一図）
草の花形（一図）
直心立の内真の花形（一図）
直心立の内行の花形（一図）
直心立の内草の花形（一図）
除心真行草の事
除心立の内真の花形（一図）
同　請上り立（一図）
同　水際除　請上り立（一図）
同　流枝持立（一図）
同　内副立（一図）
同　請流枝立（一図）
同　中流枝立（一図）
同　左流枝（一図）
除真の内草の花形（十一図）
砂物真行草の事
砂の物の内真の花形（一図）
同　行の花形（一図）
同　草の花形（一図）

巻二　「立花時勢粧　中」

雑体の図（45図）

巻三　「立花時勢粧　下」

秘曲の図（40図）
真の対の花（二図）
行の対の花（二図）
草の対の花（二図）
合真（一図）
二つ真（一図）
おもと前置（一図）
小しだ前置（一図）
松の前置（一図）
竹の胴（一図）
南天の胴（一図）
藤の心（一図）
見越竹（一図）
牡丹の心（一図）
草花（一図）
松竹梅（一図）
杜若一色（三図）
荷葉（蓮）一色（三図）
菊の一色（三図）
水仙一色（三図）
松の一色（三図）
紅葉一色（三図）
櫻の一色（三図）
草花砂の物草（一図）

巻四　「立花秘伝抄　一」

常磐木の部
木　枝　気倏　株　蘖　葉
花　蔓　松　檜　柏　枇杷
栢樹　栂　榊　かなめ　わくら
しらかし　かすおしみ　黄楊
棕櫚　杉　うすの木　夏はぜ
ふしくろ　栗の若ばえ　猿すべり
檜の葉　まゆみ
柞　晒木　苔木　柳　河楊
紅葉

巻五　「立花秘伝抄　二」

花の部
櫻　梅　桃　海棠　梨の花
辛夷木　杏の花　百日紅
蘇枋花　木蓮花　椿　山茶花
石榴花　長春　躑躅
蓮花つつじ　餅つつじ
五月つつじ　かうぼけ　馬酔木
紫陽花　くちなし　桐の花
実の部
澤水木　水木　梅もどき
七かまど　たらよう
仙蓼　みむらさき　つる水木
深山樒　たちばな　燈籠草
えびついばら　南天　おもと
通用物の部
竹　笹　牡丹　藤　南天
小しだ　萩　山吹　庭櫻
粉団花　小でまり　米柳
小米花　黄梅　連翹　種紫
つる水木　えびついばら
仙蓼　きじの尾　下野　しのぶ
矢筈　磐梨　がんそく　白丁花
岩檜葉　ひとつ葉　茘枝
薔薇

巻六　「立花秘伝抄　三」

草の部
金盞花　蕗花　著我　高麗菊
鴨脚花　あやめ　芥子花
うつぼ草　春菊　銀寶珠
杜若　きすげ　姫萱草　石竹
薊　花菖蒲　芍薬　早百合草
姫百合草　洗百合草
あたご百合草　為朝百合草
鹿子百合草　葦　蒲　つくも
蓮　河骨　紫苑　萱草　葵
桔梗　女郎花　雁緋
松本仙翁花　仙翁花　檜扇
薄　唐黍　鶏頭花　旋覆花
黄精　蒲公英　紅花
だんどく花　菊　寒菊
われもこう　粟　駒つなぎ
澤ききょう　犬子草　浜木綿
蘭　藤ばかま　鼠尾草　龍膽
よろいとおし　唐車前　あわ雪
花づる　七重草　茲草
きんき草　矢筈　秋海棠
いさざ　野かいどう　けまん
茜草　莎草　櫻草　虎尾
つち草　金寶花　にし木
うつぼ草　仙茨菰　ばれん
佛生花　岩芭蕉　水仙花

巻七　「立花秘伝抄　四」

七つ枝の事（図）
（立花道具の図）
対の花真行草の事
松竹梅三瓶の事
立花陰陽の事
十三ケ條法度の事（図）
古代十ケ條法度の事
立花八戒
立花十徳
立花十体
祝言に嫌うべき事
立花細工の事（図）
草木水あくる事
花瓶の事（図）
込の事（図）
床前の事
下指の事
立花見様の事
立花習いようの事

巻八　「立花秘伝抄　五」

九品の花形立様の事
極真立
除心真の花形立様の事
除心行の花形立様の事
除心草の花形立様の事
草の花形立様の事
砂の物真行草
地取の事（図）
立花名目　訓解
心の事
正心の事
副の事
請の事
見越の事
流枝の事
前置の事
胴作りの事
控枝の事
立花腰の事
水きわの事
かこいの事
谷洞の事
つや　あしらいの事
意気の事　うつりの事
張弛の事
立花色の事
貫枝の事

以上のような内容になっている。

京都新聞3月20日㈭朝刊掲載　京都いけばな協会代表者のいけばなが毎週木曜にカラーで紹介されています

季の花　伝華再見 18

桑原専慶流

桑原　仙溪

花材　啓翁桜、菊、松、椿

手に入りやすい啓翁桜で、小ぶりの立花を―
撮影・宇佐美宏

自然美、躍動感、風情を大切に

流祖・桑原冨春軒仙溪は江戸前期の立花の名手で、1688年に「立花時勢粧」8巻を出版しました。自然の草木や栽培植物の生態を観察し、その美しさや躍動感、風情を大切にするよう説いています。

118の立花図がありますが、「櫻之一色」はいつ見ても魅了されます。自然の枝ぶりを生かした流麗な姿。技量が問われる万年青のみを水際で見せ、桜の風格を際立たせています。

いつか自分もこんな立花を立ててみたいと思う半面、これほど見事な桜を切る以上、立花の奥義を極めるまでは立ててはいけないとも思っています。

流祖、桑原冨春軒仙溪の「立花時勢粧」（1688年）から「櫻之一色」

出合い花（8）

ヘリコニア　谷渡り

＜9頁の花＞　仙溪

変わった葉に出合った。

谷渡りの葉のふちがギザギザになっている。いや、葉のふちから細

長い触手のようなものが無数にのびている。近くを虫が飛んだら、捕まえようと動き出しそうである。なぜこんな形になったのだろう。花屋ではタニワタリ・ドラゴンと呼んでいた。

まずタニワタリ・ドラゴンの形を見せたくて、細い口の器に立てたが、相手に選んだヘリコニアをどう入れるかかなり悩んだ。前に入れると葉が隠れてしまう。後ろに立てると葉とくっついてしまう。横に出すと平凡になる。そこで茎を撓めて葉の中程から真横に出るように入れてみて落ち着いた。

花材　タニワタリ・ドラゴン
（チャセンシダ科）
ヘリコニア（芭蕉科）
花器　白釉細口花器（清水卯一作）

カラーと薔薇

＜10頁の花＞　櫻子

花材　カラー（里芋科）
薔薇（薔薇科）
ニューサイラン（竜舌蘭科）
花器　ガラス水盤

カンガルーポーと海葡萄

＜11頁の花＞　櫻子

花材　カンガルーポー
（ハエモドルム科）
シーグレープ（蓼科）
カーネーション（撫子科）
花器　白釉陶花器

和服

和服はなかなか着慣れないがいいものである。

和服は基本的に右前に着る。右前という言い方は、右の衽（おくみ）を前に（先に）体につけるのでそう言うそうだ。衽が何か分からない人は調べてください（私も調べました）。

「続日本紀」によると、719年に全ての人は右前に着る命令が出されたとのこと。中国ではすでに、敵対する蛮族が左前に着ることに対抗して右前に着るようになっていたためだ。蛮族とは北方の遊牧騎馬民族のことで、彼らが弓を射るのには左前のほうが都合が良かったのだ。

ちなみに洋服は男性と女性で合わせ方が反対なのは何故でしょう。その昔、ヨーロッパの上流階級にボタンのついた衣服が定着しはじめた時に、男性は自分で着るので右側にボタンがつけられ、女性は召使いに着せてもらうためその逆につけられたそうだ。それにしても今もそのままなのは何故なのかは知らないが、ボタンを左手で器用にはめる女性の方が、右脳が発達しているかもしれない、などと想像するのも面白い。左脳は文字や言葉などを認識し、右脳は視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚などの五感を認識するそうだ。

話は脱線したが、和服文化がなくなるのは寂しいことだ。まずはハレの日だけでもできるだけ和服を着るようにしたいものである。和服を自分で着られる人は脳も発達するのでは？。

桑原専慶流いけばなテキスト611号　2014年5月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

シューベルティ

仙溪

アリウム・シューベルティをいけた記憶は数えるほどで、昔からの花材なのだが、特別な花材という印象がある。同じ百合科・葱（ねぎ）属（アリウム属）のアリウム・ギガンチウムは背が高く、いけばなでも様々ないけ方ができるのに対して、アリウム・シューベルティの茎は20～40㎝くらいなので、低い位置にしかいけられない。

ゴムの木の葉の前にアリウム・シューベルティを重ねると、淡い赤紫色の花火のような花が際立つ。色の濃淡。面と線の広がり。静と動の対比が花の個性を引き出してくれる。華やぎを増すためにゴムの木の葉の間から赤色のアマリリスを立てた。

花材　アマリリス（彼岸花科）
　　アリウム・シューベルティ（百合科）
　　インドゴムの木（桑科）
花器　ガラス花器

アリウム・シューベルティ

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2014年
6月号
No.612

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

出合い花（9）

＜表紙の花＞　仙溪

花菖蒲（はなしょうぶ）
紫陽花（あじさい）

槍の穂先のような蕾が、ゆっくりとほころび、羽をひろげるように花が開いた。花をいける楽しみは、そんな瞬間にある。

白い花菖蒲のとなりには、外国育ちの赤みの強い紫陽花が、水をふくんで咲いている。紫陽花に花菖蒲。一見普通の組みあわせだが、とっておきの器にシンプルに出合わせると、眩しく輝きだした。いけばなは面白い。もの云わぬ花が、周囲に生のエネルギーを放つ。たった一本と一輪の出合いなのに。

花材　花菖蒲（菖蒲科）
　　紫陽花（紫陽花科）
花器　金彩ガラス花器
　　（ウルリカ・バリーン作）

太藺　芍薬

＜2頁の花＞　仙溪

花型　株分け生花
　　主株　太藺（蚊帳吊草科）
　　子株　撫子（撫子科）
花器　青磁水盤

太藺の細い線が揃うことで生まれる造形美は、他のものではつくることができない。太藺の生花で気を遣うのは、どこから見ても茎の線が交

叉しないようにすること。太藺だけでは地味なので、季節の花と株分けにすることが多い。撫子を子株にいけた。

右の写真の子株は「剣山の粧」という芍薬で、葉が小さく締まっていて子株に丁度いい。蕾は小さいが、咲くと大きな玉状になる。

床の間に花菖蒲の軸を掛けて飾った。花の絵の軸を掛けて花をいけることはあまりないが、水ものの太藺と陸ものの芍薬に、水辺の花菖蒲が加わると趣が増す。

七竈　鉄線

＜3頁の花＞　仙溪

花型　二瓶飾り
主瓶　七竈（薔薇科）
副瓶　鉄線（金鳳花科）
花器　染付花瓶（加藤巌作）
　　三つ足水盤

鉄線の生花には支柱がわりの枝が要る。七竈をいけたあとの残り枝を使った。鉄線は足元をよく解しておく。

花菖蒲二種

＜4頁の花＞　仙溪

花菖蒲の開花は六月、北海道から九州まで、全国各地の花菖蒲園で色とりどりの花を水辺で咲かせる。江戸時代から品種が増えて、現在では二千種もあるそうだ。葉とともに勢いよくいけたい。

花材　花菖蒲二種（菖蒲科）
　　ライラック（木犀科）
花器　方形金三日月文花器

立華時勢粧を読む　②

「立華時勢粧」は次のような構成になっている。

「立花時勢粧　上・中・下」　（3冊）

「立花秘伝抄　一　～　五」　（5冊）

「立花時勢粧　上・中・下」には118の立花図が収められ、花形真行草の説明が添えられている。

「立花秘伝抄　一・二・三」は立花に使われる花材解説だが、立花での扱いが詳しく述べられている。

「立花秘伝抄　四・五」は立花の基本や心得など、最も大切なことがらが詳しく書かれている。

ではまず「立花時勢粧　上」より「立華時勢粧序」「真行草の図」「除心真行草の事」「砂物真行草の事」に書かれていることを紹介する。（文中の句読点は、読みやすいように筆者が加えた。）

立花時勢粧　上

立華時勢粧序

およそ瓶に花を立て楽しみとなすわざ、もろこしにもありと聞けど、法を定め掟を守りて指す事なし。和朝には昔日　　この道に長じ、東山音羽の桜に苔むしをそがせ、西谷や高雄の紅葉には晒木を削らせ、あるは小しだのみどりを夏ばせに映し、あるはかるかやのおぼつかなく水仙のざれたるもおかしく、おのれおのれが出生直ちにかんがみ、うつり行く自然の気色を瓶にうつして、翫びたまいしより、代々の楽となりにたり。その風景のたえなるにいたりては、春の山の笑る顔に詞の花のことぶきを立て、あるじの目をよろこばせ、秋の山の愁たる形に、

第一図
立花　松直真
真の花形
松　竹　梅　檜　柘植　伊吹　水仙
熊笹　ひさかき　枇杷

なき人の作善を追うて仏の道うとからず。されば瓶上に南山の美をつくし、砂鉢に西湖の風色をうつす。ちからをもいれずして高き峰、深き溪を小床に縮む。至らずして千里の外の勝景をみること、その術諸芸の及ぶところにあらず。いでやこの道に名ある人。くれ竹のよよに絶えせず、松が枝のおりおりに出て、形体めづらなる風俗を立て初めしより、瓶の下水を味ふるもの数多になりきて、予も又花に遊ぶこと久しく。且つはたつきなき山路にたどり、かつはしるべなき野辺に迷い、好めるを友とし、優るるを師として、多問多聞を恥じず。それよりこのかた諸師の秘伝と諸書奥義と、鍛錬つくして、新たに風体を指し出せり。然れども古法の格式草木の出生、もとより背くことなし。今ここに図する所の百二十瓶四時の景物に随いて、会をなし、諸人庭に沓いれし席の花形なり。これ人の目だつべき色もなく、心とどむべきふしも侍らねど、よしや笑草。四方にはびこり、根ざしのかれぬよすがともならなむかしと、名付くるに時勢粧の字を仮り用いるものなり。

貞享五年弥生日

真行草の図

儒書に云う、真は人の正しく立つが如く、行は人の行くが如く、草は人の走るが如し。立花なおその意義をもってこれを名るもの乎。

瓶に花を立るに真行草の三つあり。古書に序発急の花といえり。古人松を切り花を折って瓶

第二図
立花　松除真
行の花形
松　柳　梅　柘植　伊吹　椿　熊笹
枇杷　檜　小柏　嫩

にむかうより、まず真の花形をあらわし、それより真を行にやつし、行より草の花形を出して、七つの枝を定め、またそのほか数多のならいを立つ。万木千草の出生をかんがみ、一草一木に立様あることを伝え、野山水辺おのづからなる景気を居所に写して楽とす。今ここに三瓶を図して初学の教とす。立様口伝外にしるすものなり。

真の花形（第一図）
行の花形（第二図）
草の花形（第三図）

右真行草の三瓶、古人の法式を守り、代々指し来る所に、中頃名師鍛錬工夫の妙用よりその一を又三つにわけて、真に三品、行に三品、草に三品、九品の花形を出す。然れども秘して代に伝えず。まれに相伝する人ありて真を立れども行を立る事かたく、行を指せども草の花形指こと難し。まして九品の花形ことごとく得る人はなかるべし。されば古人のいわく、ある時の花形は如来のごとく、菩薩のごとく、金剛力士のごとくなるべしといえり。花道のみにかぎらず、諸道諸芸もかくぞ有るべき。伝え聞く、高野大師は筆の道に通達ましまして、皮肉骨の三筆をふるい給いしによりて、和国第一の筆妙なりと云えり。立花真行草も又かわる所あるまじや。今ここに図する所の九品の花形、秘伝たりといえども世にひろむるものなり。立様口伝外にしるしぬ。

第三図
一株砂物　松真
草の花形
松　蔓梅擬　伊吹　晒　柘植　嫩　樫木　熊笹　菊

※参考文献
『いけばな美術名作集　第三巻　立華時勢粧』（日本華道社刊）
『花道古書集成　第一期第二巻』（大日本華道界刊　思文閣出版刊）

【テキスト611号　訂正】

（5ページ1段25行目）

除心真行草の事

除心立の内真の花形（一図）

同　行の花形　請上り立（一図）

カラーとアジサイ

＜9頁の花＞　櫻子

花材　カラー（オレンジ、黄色）

紫陽花（あじさい）（紫色、白色）

花器　カットガラス花器

初夏の山

＜10頁の花＞　櫻子

花材　裏白の木（薔薇科）
　　スイートメモリー（百合科）
　　撫子（撫子科）
花器　染付花器

いばら二種

＜11頁の花＞　櫻子

花材　難波茨（薔薇科）
　　浜茄子（薔薇科）
　　アスチルベ（雪の下科）
花器　ガラス花瓶

最近の趣味は虫捕りだそうです。

桑原専慶流いけばなテキスト612号　2014年6月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

芦屋の花屋さん　櫻子

JR芦屋駅の近くに、芦屋マダム御用達の素敵な花屋さんがある。三ヶ月に一度はこちらの歯医者さんに通っているので、この花屋さんに立ち寄るのを楽しみにしている。

小さなお店に所狭しと枝もの、花、観葉植物が置かれているのだが、買うよりも何時までも眺めていたいお店なのだ。

店内の中央には白～ピンク～紫色にかけての花が盛るように配置され、裏に回ると黄色からオレンジの花が鮮やかに飾られている。大きな枝はそれらの花々の上で広がり、窮屈に括られていない。

綺麗に見せるコツとセンスが有るのだと思う。

観葉植物や多肉植物なども数は少ないが、見たこともない様な珍しい物が多い。それら全てが鉢のままで売られていない。ベルギーやフランスの焼きものに入れられている。

今日はユーフォルビア・オンコクラータというトウダイグサ科の植物を買って帰った。茎が棒状に伸びるのが本来の姿なのに、左の茎は石化して珊瑚のような形をしている。植物が石化する理由はよくわからないが、ちょっとふてくされた様にも見える。

そういえば最近石化している花（鶏頭やアンスリウムの花の部分など）を好んでいけている。

ユーフォルビアは育てたいので、根付きのまま深い鉢に入れ、ゼラニウムと取り合わせた。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2014年
7月号
No.613

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

被災地へ

仙溪

5月の末に、2年ぶりに被災地を訪れた。NPOの仲間3人で訪れたのは前回と同じ宮城県気仙沼市の2カ所の仮設住宅。今回も現地のボランティア団体にお世話になり、当日は会場がいっぱいになる賑わいになった。前回の訪問を覚えていて下さった人も多かった。

「お花は人気がありますね」。孤独にならないようにと、イベント参加を呼びかけても、いつもそんなに多く集まってくださらないとのこと。

「あと2年は仮設暮らしなの」。集団移転の候補地は決まったものの、建設待ち状態だそうだ。「オリンピックが決まったおかげで、いつになることやら」「巨大な防潮堤ができちゃうと海との関わりが絶たれてしまう」お花の後の雑談に花が咲く。「帰ったら皆に伝えます！」

過去に何度も津波災害を経験した三陸沿岸。気仙沼にあるリアス・アーク美術館では、「東日本大震災の記録と津波の災害史」という常設展示で、悲惨な現実を記録、検証し、現場から未来に向けてのメッセージを発信している。同名の図録（800円）は郵送で購入可能。

「人間だけを自然から切り離してはいけない。人類は自然を畏れ敬い、自然のリズムに身をゆだねて生きてきたはずだ。その永い時間の蓄積を再認する必要がある。」図録より。ここに編まれた一言一言が胸を打つ。多くの人と共感できればと思う。私たちの未来のために。

花の御座(おわ)す場所

＜表紙の花＞　仙溪

花のおわす場所をどうつくるか。そんなテーマで花をいけてみた。主役の花を自分に置きかえて、まわりに居心地のいい景色をつくる。見たことの無いような景色ができればなおいい。大自然は決して単調ではなく、千変万化だ。自分の記憶の引き出しを頼りに、いけばなに「自由」を得よう。

花材　オクロレウカの葉（菖蒲(あやめ)科）
　　アンスリウム二色（里芋科）
花器　ガラス水盤（岩田糸子作）

市松模様の器

＜2頁の花＞　櫻子

おやつをいれておきたくなる器。色とりどりの飴のかわりに、3色の蛍袋(ほたるぶくろ)をいけた。

花材　珍至梅(ちんしばい)（薔薇(ばら)科）
　　蛍袋三色（胡麻の葉草科）
花器　釉彩市松蓋物（横山武司作）

撫子が主役

＜3頁の花＞　櫻子

たった一本の撫子だけど、配色と花形次第で主役にできる。

花材　猿捕茨(さるとりいばら)（百合科）
　　撫子(なでしこ)（撫子科）
　　紫陽花(あじさい)「紅(くれない)」（紫陽花科）
花器　澱青釉紫紅斑花瓶
　　（宮下善爾作）

葉蘭　七葉　　仙溪

花型　草の花型　副流し

花器　白竹竹筒

生花の中でも最も基本的な形式をそなえている「葉蘭」は、緑の葉をあつめて形を作り、その造形の美しさを見るいけばなであり、華麗な花の美しさよりも、静寂な内面美を見るいけばなといえる。

単純な葉の組みあわせによって、均衡のよくとれた流麗な花形を造り上げ、そこに高雅な品格をもとめようとする。徹底した技術の修練によって素朴な材料の中から美をみつけ出すこの生花は、誇張していえば、「禅」のこころをもつものといえる。

（以上、専溪生花百事より抜粋）

以前は大、中、小の葉を組んで売られていたが、最近では大きな葉しか売られていない。中葉、小葉は家の庭から切っていけている。

立華時勢粧を読む　③

立花時勢粧　上

（前号の続き）

直心立の内真の花形　（第四図）
直心立の内行の花形　（第五図）
直心立の内草の花形　（第六図）

第四図

第五図

第六図

（ここでは解説文がないので、上の３図は「立花秘伝抄　五」の「極真立」で掲載します。）

除心真行草の事

除心の内真の花形と云うは、直心立てをやつして、心を横へのき、梢の上へ回して、除心とも正心立とも名付けたり。副、請、見越、流枝、前置、長短高下の出し所、直心立とかわる事なき事は、古来仏前対の花にかならず用い来る花

第七図
立花　木蓮除真
除真立の内真の花形　冨春軒
木蓮　伊吹　松　柘植　躑躅　小菊
樫木　枇杷　著莪　要

形なるゆへ。卓、香炉、鶴亀の荘厳、定法あるにまかせ、立花もこれに随いて、流枝、前置の長さ、その外寸法法式ある事なり。然るに常の花にもその式法を守りて人におしゆるの初めとするより、あまねく立花の風俗となれるものなり。

除心立の内真の花形（第七図）

除真の内行の花と云うは、前の花形をやつして、異曲さまざまにしんをくるはせ。六つの大枝の長短高下、心に随いて、くるいたる時は、花形風流にて、ひときわ花麗に見所おおく、作意も働きて、おのずから珍しき姿も出来るなり。往昔のすき人[注1]むつかしくあしらいかたき心をあつめ、鍛錬工夫をなし、いろいろの花形を指し初めて、代のたのしみ[注2]へとなす。所謂、水際除のしん、請流枝立、中流枝立、左流枝立、内副立、流枝持の花、これを行の[注3]花形という。この心をもって見る時は、古来花[注4]に自由をなして、さまざまの景気をかえ、人の心をなぐさむるの使とするものなり。然るに田舎[注5]には定法にかかわりて、自由を指し得る事なし。今ここに図してその風体を知らしむるものなり。これ私の作意にはあらず。近来ひとの[注6]版行せしむるの書に多くこれある所なり。

除心の内行の花形　請上り立（第八図）
同　水際除　請上り立（第九図）
同　流枝持立（第十図、第十一図）
同　内副立（第十二図、第十三図）
同　請流枝立（第十四図、第十五図）
同　中流枝立（第十六図、第十七図）
同　左流枝（第十八図、第十九図）

第八図
立花　松除真
除心の内行の花形請上り立　桑原次郎兵衛これを立つ
松　梅　柳　柘植　樫木　椿　嫩

注1～6　初版本では次の記述になっている。1名師　2おしえ　3名目の　4古人　5近代は　6名師の

除心のうち草の花形と云うは、行の花形より指出して心の除様定相なく、草木自然の形をそのままに、さのみ細工にかかわらず、或は直ぐ或は斜に、請、副、流枝、前置その外の大枝もまたかくの如く。長短高下の定法を離れ、請なふして請をあしらい、副なふして副をもたせ、六つの枝、ありと思えばなく、なきかとおもえば忽然と有りて、一枝も欠くる事なく、出生に背かず、法度をもれず、花形円満にして、しかも意気あり発生あり艶あり色あるを、草の花形という。これ格を離れて格にあい、習を捨て習にかなう手段なり。されば古代の名師工夫をなし、心をくだきて、自得の妙手より、指し出したる形にして、立花の骨髄これなるべし。近代の人、この花形を指し得んことを願えども、従来の手癖離れがたく、又は七の法式に自縛せられて、いつも同じ花形のみにて、過ぎ行くこと。例えば鋳型をもって瓶を鋳るに、出来不出来あるといえど、瓶の形は変わる事なきがごとし。名人の花と云うは、十度二十度指すといえども珍しき一手あらずという事なし。されば真行の花は指し得るとも、草の花形にいたりては、指す人まれなり。師を尋ね域に至らずんば、この妙を得がたかるべし。仮に図をしるして爰に書を略しぬ。

除真の内草の花形（第二十図～第三十図）

※省略した絵図は後の関連項目のところで掲載予定。

第二十図
立花　梅除真
除真の内草の花形　桑原次郎兵衛
梅　松　柳　椿　水仙　枇杷

※参考文献
『いけばな美術名作集　第三巻　立華時勢粧』（日本華道社刊）
『花道古書集成　第一期第二巻』（大日本華道界刊　思文閣出版刊）

8

スポットライト　仙溪

表紙とこの頁のいけばなは、あえて中央に低く花をいけている。

群生の中でキラリと光る花、そんな印象のいけばなである。

いけばなにおいては、「間」が重要になるが、花形の中央に縦長の隙間をつくると、不思議な風の通り道が生まれる。

立花の花形に「二つ真」というのがある。「立花時勢粧」にも一作絵図が載せられているが、水面まで真っ直ぐに空いた隙間の緊張感が伝わってくる。

その解説は先に掲載するが、「隙間をどう生かすか」というテーマで花をいけてみるのは面白い。

目には見えないスポットライトが、舞台中央の花を浮かび上がらせている。

花材　縞太藺（しまふとい）（蚊帳吊草（かやつりぐさ）科）
紫陽花（紫陽花科）
百合（百合科）
花器　カットガラス水盤

ブルーレースフラワー

＜10頁の花＞　仙溪

赤い葉脈のカラジウムが決め手。

花材　トルコ桔梗（竜胆科）
　　ブルーレースフラワー（芹科）
　　カラジウム（里芋科）

花器　桃花瓷壺（木村展之作）

スモークツリー

＜11頁の花＞　櫻子

向日葵の黄色と、花器のモザイク柄にある黄色との関連性が面白い。

花材　スモークツリー（漆科）
　　向日葵（ひまわり）（菊科）
　　アンスリウムの葉（里芋科）

花器　石垣手花入（森俊次作）

桑原専慶流いけばなテキスト613号　2014年7月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

出合い花（10）

櫻子

薔薇
フランネルフラワー

家元がはじめた「出合い花」だが、いざいけてみるとなかなか難しい。「テキスト」のために写真撮りをする以上、普通の一輪挿しではだめだと思うからかもしれない。

たった二本のいけばななのに、とても奥が深い。

新鮮な出合い。

とっておきの器えらび。

この二つのテーマをクリアしなければならない。

でも、日常の中で、たとえば来客前に急いで花のいけかえをしているような時に、いい感じの出合い花を自然にいけていることも多い。そんな時には、「新鮮な季節の花を、洒落た器に」と考えながらいけている。

「出合い花」にはいけばなのエッセンスが凝縮していると思うので、是非みなさんにも挑戦してみてほしい。新たな発見がきっとある。

大好きなイブピアッチェという薔薇に、優しいフランネルフラワー。あまり考えすぎずに、本能的に好きな花を組み合わせてみた。

花材　薔薇（ばら）「イブピアッチェ」
（薔薇科）
フランネルフラワー
（芹科・オーストラリア原産）

花器　結晶釉細口花瓶
（前田保則作）

嫩？

仙溪

「立華時勢粧」の紹介も3回目となったが、読んでいただいているだろうか。現代語訳にすると原文の雰囲気が伝わらないので、あえて元の言い回しのままにしている。少々読みづらいかもしれないがご容赦を。

絵図の横に示した花材名については、『いけばな美術名作集　第三巻　立華時勢粧』（日本華道社刊）を参考にさせていただいている。

その中に「嫩」という花材名が何度も出てくる。はじめて見る字で調べてみると、

【嫩】［音］ドン　ノン
［訓］わか・い

《意味》若い。若くて柔らかい。

とあった。嫩葉は若葉のこと。柔らかな枝を加えることで、立花を生き生きとさせているのだろう。

鳥の囀（さえず）りに耳を欹（そばだ）てるの図。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2014年
8月号
No.614

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

大切なことは？

仙溪

宮城県の海岸には大きな黒い袋が整然と積まれていた。袋の中は震災がれき、いや津波でグチャグチャにされた大切なものたち。土地の人はどんな思いで見ているのだろう。愛しい過去の思い出。忌まわしい理不尽な体験。

黒い袋の中には悲しみが詰まっている。自然災害がもたらしたもの。その上に私たちが生んでしまった核汚染が追い打ちをかける。過ちと真剣に向き合わないといけない。つくってしまった過ち。使い続けた過ち。無関心の過ち。騙し騙されてきた過ち。

「放出された放射性物質は大変危険です。原子力政策はまちがっていました」と、いつか軌道修正してくれるだろうなどと思うのは間違いだった。他人任せではだめだ。日本の、地球の行く末は、一人一人がどんな生き方をするかにかかっている。

自分では何も生み出さず、消費することだけに熱心な人たちがいる一方で、純粋に、誠実に、自然の恵みに感謝して今を生きる人たちがいる。地に足をつけて、先人の教えのもとに、信じる道を進む人たち。そんな人の言葉に目を覚まさせられる。教わる、育てる、楽しむ。豊かな心を得るヒントは、自然と共に生きてきた先人の知恵の中にこそあると思う。

私たち一人一人が生き方を見つめなおす時なのかもしれない。日々の暮らしの中で自然の命をどれだけ感じているだろうか。「ほんとうに大切なことは?」

サラセニア　＜表紙の花＞　櫻子

サラセニアは、長い筒状の葉で虫を捕らえる、いわゆる食虫植物だ。北アメリカ東部からカナダの湿地に分布する。

珍しく切り花でサラセニアが売られていた。筒と蓋の部分にある赤い網目模様が綺麗だったので、それが目だつようなとり合わせにした。

花材　サラセニア（サラセニア科）
　　アンスリウム（里芋科）
　　スモークグラス（稲科）
花器　赤黒ガラス花器

アーティチョーク　＜2頁の花＞　仙溪

アーティチョークは地中海沿岸原産の多年草で、西洋では若い蕾が食用として売られている。

重量感のある、鮮やかな赤紫色の花はたとえ一輪でも存在感がある。ガラス器の中にガラスのコップを沈めた上に剣山を置いていけた。

花材　アーティチョーク（菊科）
　　カラー（里芋科）
　　カラジウム（里芋科）
花器　カットガラス花瓶

タニワタリノキ　＜3頁の花＞　櫻子

谷渡の木は茜科の常緑小高木。日本の九州中部以南から中国、東南アジアまで分布する。球形の花が愛らしく、鉢植や切り花でもお目にかかるようになってきた。

作例の枝はアメリカタニワタリのようだ。こちらは北アメリカ原産の落葉低木。明るい葉色が爽やかだ。いずれも谷などの湿地に生える。

花材　姫百合二種（百合科）
　　谷渡の木（茜科）
花器　通草蔓手付籠

グリーンカトレア

櫻子

知性があり完成度が高く、最も調和のとれたかたちである植物は蘭の花らしい。昆虫に与える花蜜も、正確に運んでもらう花粉も、緻密に計算して失敗のないように考えて、自分達の美しい姿を守ってきた頭の良い花の一族。

カトレアは熱帯の植物だが、ブラジルから苔や地衣類を運び出す際に、それらを梱包するために使われたらしい。この荷物を受け取ったカトレイ氏は梱包用に使われた葉の厚い植物に興味を持ち、育てたところ大輪の花が咲き人々を驚かせたという。１８２４年の事である。その蘭は増殖が遅く栽培に多くの経費がかかった。

特にカトレアは高嶺の花だが、こんな劇的なデビューだったとは！

その後、この蘭は高値で取り引きされ、西欧で品種改良が進んで、今では四輪立ちのグリーンカトレアも栽培されている。

この珍しい花を咲かせるまで何年かかったことだろう。

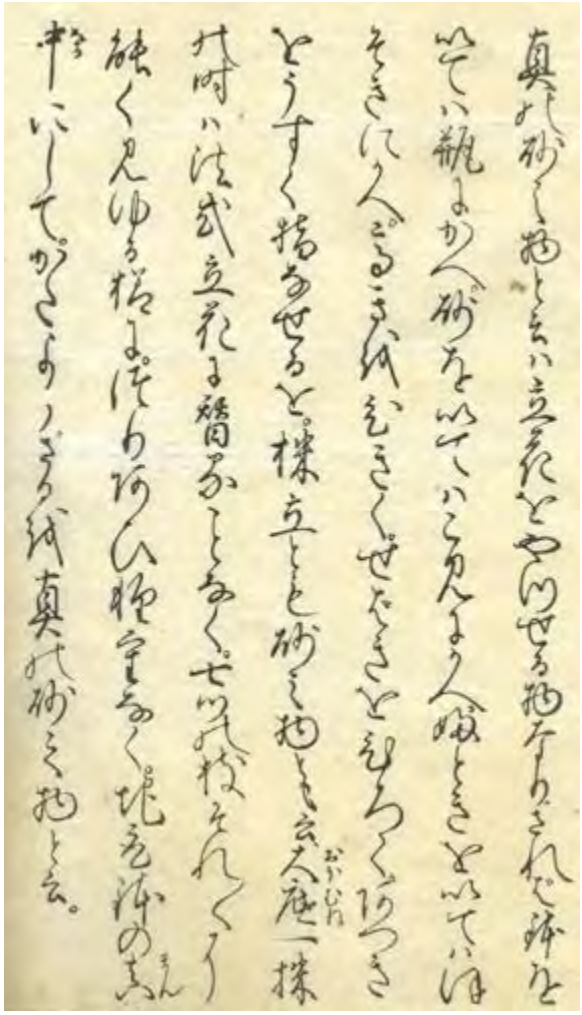
同じ蘭科のオンシジウムと取り合わせて、ミントグリーンの色を際立たせた。

花材　グリーンカトレア（蘭科）
　　オンシジウム（蘭科）
　　葱坊主（ユリ科）
花器　紺色ガラス花瓶

「立華時勢粧」の文章

今月号で紹介した「立華時勢粧」の文章が、元の木版刷りではどのようなものかを知っていただくために、初めの段落の部分を転載しておく。どうぞこの頁をめくりながら、読み進めてみてください。

例えば「を」の字だけ見ても、三つの字を使い分けている。



立華時勢粧を読む　④

立花時勢粧　上

（前号の続き）

砂物真行草の事

真の砂の物と云うは、立花をやつせる物なり。されば鉢をもっては瓶にかえ、砂をもっては込にかえ、太きをもっては細きにかえ、高きを低く、狭きを広く、厚きを薄く指しなせるを、株立とも、砂の物とも云う。おおむね一株の時は法式立花に替わることなく、七つの枝それぞれによく見ゆる様に、つりあい軽重なく、地取り鉢の真ん中にして、かたよらざるを真の砂の物と云う。

行の砂物と云うは、元来一株なる物を、二つに割け、中をあけ、小心二つ、前置二つ、心のかたを男株といい、請の方を女株という。法式大様前に同じく、両方軽重なき様に、地取り鉢に随いて、苔晒木鮮にして株組、取り合い、はづみあり、意気あるところを専らにして、景気するどに花形勢力風流なる様に立つべきものなり。取り組み細工等外にしるす。

草の砂の物と云うは、一株二株、三株はまれなり。二株たりといえども、小心、前置、一方にのみ用いる事なり。但し一方はあしらい有りても然るべし。女株軽き時は、男株の方より長き枝をだし、或は心のすえ様にて軽重をはかり、請かと思えば流枝、控かと見れば副にして、或は大枝をもって小枝にかえ、小枝をもって大枝をあしらい、七つの枝一つも欠ける事なく、意気、はづみ第一に、艶あり、色あり、異曲風流

第三十一図
一株砂物　芦真
砂の物の内真の花形　専定寺
芦　竹　百合　小菊　桔梗　熊笹
仙翁花　杜若　著莪

に勢(いきおい)つよく、花形一面に束て見る時、釣り合い片落ちなきを草の砂の物という。たとえば文字の形のごとし。唐よう、日本よう、様々の流を書きやつすといえども、理に叶い、道にいたりぬる人は、読むこと安くして、頓(とん)にその理を悟る。立花もまたこれに同じ。

砂の物の内真の花形（第三十一図）
同　行の花形（第三十二図）
同　草の花形（第三十三図）
立花時勢粧上の終

ここまでが「立花時勢粧　上」の内容である。

続く「中」、「下」には立花図がそれぞれ45図、40図掲載されているが、「下」の最初に秘曲の図の名称が22個書かれているのみで、文章による解説はない。

立花時勢粧中（立華時勢粧　巻二）
雑体の図（45図）
立花時勢粧下（立華時勢粧　巻三）
秘曲の図（40図）

「立花時勢粧　上」の文章を紹介してきたが、ここでその内容を少し振り返ってみよう。

「立華時勢粧　序」は立花の素晴らしさを讃えた名文だと思う。立花の技を身につけるのと同時に、この文章にあるような雄大な心の有り様(よう)を大切にしていたい。

「瓶(へいじょう)上に南山(なんざん)の美をつくし」
「砂鉢に西湖の風色(ふうしょく)をうつす」
「ちからをもいれずして高き峰、深き溪を小床に縮(しじ)む」
「至らずして千里(ちさと)の外の勝景をみること、その術、諸芸の及ぶところにあらず」
「古法の格式、草木の出生、もとより背くことなし」
「今ここに図する所の百二十瓶、四時の景物に随(したが)いて、会をなし、諸人庭に香(くゆ)いれし席の花形なり。これ人の目だつべき色もなく、心とどむべきふしも侍らねど、よしや笑草(わらいぐさ)。四方にはびこり、根ざしのかれぬよすがともならなむかしと、名付くるに時勢粧の字を仮り用いるものなり」

居ながらにして、自然の勝景を味わえる「立花」の術は、諸芸の及ぶところではないと言い切っている。同じ頃活躍

第三十二図
二株砂物　棕櫚真
砂の物行の花形　西村松庵
棕櫚　百合　晒木　松　苔　嫩　杜若
小羊歯　柘植　苔木

した尾形光琳の杜若図屏風なども、「居ながらにして、自然の勝景を味わえる」素晴らしい術だと思うが、「立花」には、実際に山や沢から集めた木や草花でつくる「生の」美しさがある。たしかに鍛錬をつくした人の立てた立花には、諸芸の及ばない「格」がある。

掲載されている百二十瓶（実際は百十八瓶）の立花図については、実際に「会の席」で立てたものだとのこと。目だつ色もなく、心に止めるべきものもないが、「立花」が廃れてしまうことのないように、あえて「時勢粧」の字を用いて記録を残すと書かれている。「立花」の神髄を究める人によって、さらに磨きがかけられてゆくことを願されていたのだと思う。

「真行草の図」では、立花には真・行・草の花形があり、またそれぞれに真・行・草があり、すなわち九品の花形があると書かれている。

何が真で、何が行で、何が草だ、とは書かれていないが、図に示されているように、次のように覚えておきたい。

真の花形とは直真のこと。
行の花形とは除真のこと。
草の花形とは砂の物のこと。

「真」は人の「立つ」、「行」は人の「行く」、「草」は人の「走る」のと同じだとしている。

「古書に序・発・急の花と云われる」

「昔から、如来のように、菩薩のように、金剛力士のようにと云われるが、花道だけではなく、諸道諸芸もこうあるべき」

「高野大師（弘法大師空海）は筆の道を極められ、『皮・肉・骨』の三筆をふるわれたことで、日本一の書の達人と云われるが、立花の真行草すべてを立てる人こそ、立花の達人である」と述べている。

真の真行草は絵図のみで解説はない。続いて、行の真行草、草の真行草については絵図と共に文章でも述べられている。

ここで注意したいのは、九品の花形の解釈については、凡その基準を示すにとどめ、あまり具体的に「こうなったら何の何形」と云っていないことである。

真・行・草のそれぞれの持つ意味合いをよく理解することが大切で、具体的な手がかりを僅かに示すことで、私たち自身が立てる中で理解しようとするように導いている。

これはとても重要なことで、絵図も含めてそのまま鵜呑みにせず、自分自身で真理を得るべき、との教えなのだ。

※参考文献
『いけばな美術名作集　第三巻　立華時勢粧』（日本華道社刊）
『花道古書集成　第一期第二巻』（大日本華道界刊　思文閣出版刊）

第三十三図
二株砂物　晒木真
砂の物草の花形　桑原次郎兵衛
晒木　松　芍薬　杜若　要　小菊
著莪　撫子

「立華時勢粧」の文字

「立華時勢粧」の文章は行書と草書が織り交ぜられている。普通に読める字があるかと思えば、平仮名もあえて別の漢字の草書体をあてたりしてあるので、読むのに苦労する。それでも文章全体の視覚的なバランスの見事さにその苦労も忘れてしまう。これははたして富春軒仙溪の筆跡なのだろうか。と考えるのも楽しい。さらに、木版刷りの彫り師の技も流石である。

参考までに、その一部を掲載しておく。

の

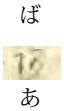
を

に

か

つ

ひ


ば

あ

な

た

明るい洋花

櫻子

ブルーベリーは夏櫨の仲間だが、北アメリカ原産。南アフリカ原産のグラジオラスと北アメリカ原産の向日葵を合わせると、明るいいけばなになる。

花材　ブルーベリー（薔薇科）
　　グラジオラス（菖蒲科）
　　向日葵（菊科）
花器　角形花瓶（ヘレンド）

アガパンサス
トルコ桔梗

仙溪

花形　生花　二瓶飾り
主瓶　行型
アガパンサス（彼岸花科）
副瓶　真型
トルコ桔梗（竜胆科）
花器　主瓶　トルコブルー陶鉢
副瓶　レースガラス小鉢

南アフリカ原産のアガパンサスと、北アメリカ原産のトルコ桔梗の生花二瓶飾り。故郷はまったく違う花なのに、素敵な共演を見せてくれている。生花の二瓶飾りは、花材のとり合わせで様々に楽しめる。互いに無い要素を加えることで味わいが増すように考える。

主株（草の花型　副流し）

子株（真の花型）

槙（まき）

仙溪

花形　生花　行型

花器　白竹竹筒

花屋で槙の名前で売られているのは犬槻科（いぬがや）の朝鮮槙（ちょうせんまき）で、夏の、特にお盆の頃の生花にいけることが多い。基本的な行の花型にいけた。

桑原専慶流いけばなテキスト614号　2014年8月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

出合い花（11）

仙溪

富士薊（ふじあざみ）
ノンリーフの枯花

富士薊は富士山周辺の山地に見られる菊科・薊属の多年草。日本の薊の中では最も大きな花を咲かせる。珍しい貴重な花だが、花フジさんの山の畑で育ったとのこと。

花フジのとし子さんに、是非「出合い花」に使って！とのリクエストをいただいたので、その場でお相手を探すことに。ふと目にとまったのが、花フジのアキチャンが手に持ったノンリーフの枯花だった。

南アフリカ原産のストレリチアの仲間で、ほとんど葉のない茎だけが長く伸びるのが特徴。耐寒性と耐乾性を併せ持つ。こちらも花は珍しく、それも枯花ということで、珍しいもの同士を出合わせてみた。

とし子さんのこだわりと、アキチャンのこだわり。手にした花にそのこだわりはすでに表れている。また、花を育てる人や集めてくる人の思いを感じていけるなら、花器の選択や花形を工夫して、自（おの）ずといいけばなになる。

自分で身につけた自分自身のこだわりを持つ。とても大事なこと。

花材　富士薊（菊科）
　　ノンリーフ（芭蕉科）
花器　掻き落とし花瓶

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2014年
9月号
No.615

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

若杉ばあちゃん

「若杉ばあちゃん」の書いた本が静かなブームになっている。数日前から、そのうちの三冊を買って読み始めている。私自身、年初に「温故知新」を唱えていたので、日本人の昔からの知恵が詰まっていそうな気がして興味がわいたのだ。

「秋茄子は嫁に食わすな」ということわざの本当の意味をご存知だろうか。「家の子孫を産む嫁を思って、食べさせたくない」からで、秋の茄子を食べると流産しやすくなることを昔の人は知っていた。

若杉友子さんはそのことを食材の陰陽で説明している。

茄子は陰性で拡散する力が強いため、食べると子宮が冷えてゆるむ。とくに秋茄子は陰性が強まるとのこと。

陰性は体の中心から外へにげていくエネルギーで、陽性は逆に体の中心に集まる求心のエネルギー。陰性の食べ物は体を冷やし、陽性の食べ物は元気が出る。食べ物に含まれる、陰性のカリウムと、陽性のナトリウムの割合を知ること。

昔の日本人の食生活は、もともと陰性である野菜を火や調味料で陽性にして食べ、季節の変化や体調にあわせて陰性と陽性の食べ物をバランス良く摂ってきた。野草の効用も大きい。肉を食べなくても強靭な体をつくれたのだ。そしてお米は陰陽を併せ持つ元気の源。味噌はそこん家の宝物。

お伝えしたいことが多すぎるので、皆さんも是非ご自分で読んでみてほしい。

若杉さんは今の日本を嘆いている。日本人一人ひとりが口と心の「食い改め」をするべきだと云われている。

良い師匠に出会えたことに感謝。これからの私たちにとって、本当に大切なことを、若杉ばあちゃんはなんとかして伝えようとしている。

山の風情　〈表紙の花〉　櫻子

山地の夜風の冷たさに色付き始めた七竈。夏の名残の高砂百合と、弾けはじめた山芍薬の実、山野草の鉢植で売られていた田村草といっしょに水盤に低く広がるようにいけてみた。水際に見えている七竈は、かなり前へ張り出している。器に水をはると、草木がほっとした表情を見せてくれる。

花材　七竈（薔薇科）　高砂百合（百合科）
　　山芍薬の実（牡丹科）　田村草（菊科）
花器　黒花模様水盤

秋色のアンス　〈2頁の花〉　櫻子

丸葉の木が秋色に色付きはじめた、かと錯覚するが、これはアンスリウムで、みんな少しずつ色が違う。季節の草花とあわせてみるとまさに秋の風情。「花の色は、こだわりをもって生かす。」ことができるかどうかが鍵になる。

花材　三島紫胡（芹科）　黒稗（稲科）
　　アンスリウム（里芋科）
花器　手付陶花瓶

村里の風景　〈3頁の花〉　仙溪

桐の実はとにかく重たい。花器ごとひっくり返らないように、前後左右のバランスを考えていける。昔は女の子が生まれると、桐の苗木を五本植え嫁入に箪笥・琴・下駄を作ったとか。「桐の木は村の娘と同い年」。里で馴染みの鶏頭と、里芋の葉をとりあわせた。

花材　桐の実（桐科）　鶏頭（莧科）
　　里芋の葉（里芋科）
花器　紺色釉花器

花と葡萄

櫻子

花屋さんに一輪だけ柳蘭（やなぎらん）が残っていた。

背が高くてピンクの濃い色の花なので、とてもよく目立つ。空気のきれいな信州の草原から送られてきたのか。多分近くに咲いていたであろう鬼百合、金水引も一緒にいけたいと思って買って帰った。

岡山から届いた新鮮なもぎたての葡萄とカラフルな高原の花。暑さも少し和らいで、秋の気配を感じる。

柳蘭は葉が柳に似ていて、花を蘭にたとえてこう呼ばれる。北米では針葉樹林帯の山火事の跡にこの花が大群落となるのでｆｉｒｅ　ｗｅｅｄ（火の雑草）と呼ばれている。夏の終わりには雪のような真っ白な種子が風にのって舞い、それは雪のようにも見えるらしい。多数の種子を作り、風で飛ばし、常に新しく群生できる場所を探す花なのだ。

花材　柳欄（豆科）
鬼百合（百合科）
金水引（薔薇科）
葡萄（マスカット）
花器　陶茶碗　塗盆

両手に花

母、素子は私が家元を襲名した三ヶ月後の八月に亡くなった。あれから十年になる。

七月の祇園祭にあわせて、アキチャン（私の右）とチャコ（私の左）が家に泊まりに来てくれた。大切な母の妹様。二人とも嫁ぐまで暮らした家で、昔話に花が咲く。

家元の娘としての煌（きら）びやかさと、夜中までかかって明くる日の二百杯の花材の束をした過酷な日々。苦労した分、家族の絆ができたこと。いろいろ教わった。

素子母さんへ。櫻子が撮ってくれた三人の写真。届きますように。

立華時勢粧を読む　⑤

立花秘傳抄　一～五

「立花時勢粧　上中下」に続く「立花秘傳抄　一～五」の五巻は、立花の花材解説の三巻と、立花の基本や心得ほかの解説の二巻からなっている。ここでその内容を紹介してゆくにあたり、膨大な量の花材についての解説は後回しにして、巻の順番を変えて、立花の基本や心得から先に紹介したいと思う。

立花秘傳抄　四

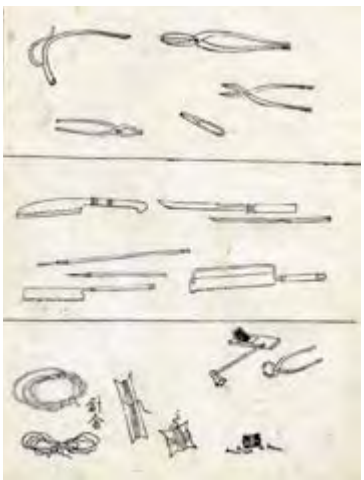
七つ枝の事

往昔、花を指し初むるに法式あり。いわゆる心、正心、副、請、見越、流枝、前置（胴　控枝これを除く）これを七つ枝と名付く。その理に至りては、最上の秘傳にして、世に知る人まれなり。然るに近世、説々まちまちなりといえども、正理にかなわず。その詞にいわく、万物皆陰陽五行より、出ずという事なし。まして草木出生、陰陽五行の七つを離れず。さるによって、七つと極めたりと云うは、天文家の謂なり。或いは遠くこれをいえば、千早振る神国、天の七代をかたどりて我朝の翫びなりといえるは、神社宮司の詞なり。又易に曰く、七つは少陽、艮の卦にして、万物終わり始まるの数なりと云うは、儒者の譬なり。広くこれをいわば、仏出世して法を説き、浄土を荘厳し、行をなし、作善を勤め、忌日を弔うに、皆七つの数をもってす。さるによって、立花は第一の手向けなりと云うは、釈氏の説なり。これ皆諸道の七つをかりて、立花の七つに対用したる物なり。いまだ知らず、別に花道の上に、七つの理あり事あり。能々工夫をなし、師に尋ねてこれを明きらめずんば、立花に自由を得る事。努々、あるべからざるものなり。

①

②

③



図①
七つ枝が図で示されている。直心の場合、正心とは言わず「心隠」と呼んだ。

図②③
立花道具の図。針金や水抜きの器具（左上）も使われていたのがわかる。

5

対の花真行草の事

極真の対の花は、若松の直心立てなり。指し合い法度を選び、祝言の意得専要なり。一方、伊吹の胴に椿の前置ならば、一方は枇杷の胴につげの前置などなどかえるなり。その他、心、正心、副、請、見越、流枝は、両瓶ともに同木同草にして、木つき枝ぶり花形よく似るように指すを、真の対と云うなり。

行の対と云うは、心は笠松の除心なり。これも胴、前置の二所をかえて、残りの大枝は、同じように指すべきなり。

草の対と云うは、心（一方桧の直心、一方竹心。桧と椿。桃と柳。松の一色と竹心。鶏頭と竹心。）右の外いろいろに心をかえ、正心、副、請、流枝五つの内にて、三所ばかりにて、対するを草と云う。残りの枝、同じからぬように立てるなり。この三対、古来の法式なり。

第七十九図　　第八十図

立花時勢粧下　秘曲の図より

第七十九図
左真の対の花　桑原正栄
松　柳　梅　伊吹　椿　柘植
水仙　熊笹　枇杷　檜

第八十図
右真の対の花　冨春軒
松　柳　梅　檜　柘植　伊吹
水仙　椿　熊笹　嫩　枇杷　樫木

第八十一図
左行の対の花　中川常意
松　山吹　躑躅　杜若　椿　伊吹
小羊歯　小菊　要　檜扇　柘植

第八十二図
右行の対の花　高橋吉兵衛
松　山吹　躑躅　杜若　柘植
熊笹　小菊　要　柏　檜扇

第八十三図
左草の対の花　寺田八郎兵衛
檜　苔　梅擬　松　菊　小菊
熊笹　柘植　嫩　檜扇

第八十四図
右草の対の花　寺田清兵衛
松　苔　梅擬　鶏頭　夏櫨　菊
小菊　杜若　樫木　枇杷

第八十二図　　第八十一図

第八十四図　　第八十三図

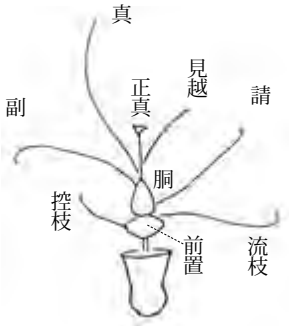
岡山県本部研修会

会期　7月27日(日)
会場　倉敷市民会館
指導　桑原仙溪　桑原櫻子
参加　120名
　　生花の部　74名
　　盛花の部　46名

全員対象の講習では立花、生花、投入、盛花の実作と「いけばなの真行草」についてお話した。

雪柳の立花　行の行形

雪柳（真・副・見越・流枝・前置）
檜扇（請・控枝）、女郎花（見越）、
菊（正真ほか）、九蓋草（胴）、
晒木（胴ほか）、姫百合、撫子。

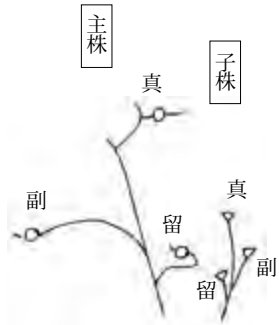


レモンくん、木に登る。

栗菊

＜10頁の花＞　仙溪

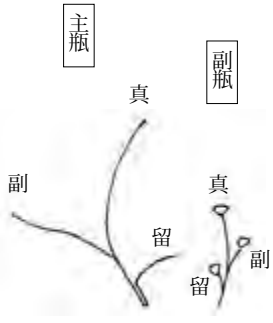
花型　生花株分け
主株　栗（山毛欅科）
子株　菊（菊科）
花器　焦茶釉水盤



夏櫨　仙翁花

＜11頁の花＞　仙溪

花型　生花二瓶飾り
主瓶　夏櫨（躑躅科）
副瓶　仙翁・仙翁花（撫子科）
花器　陶花瓶　平茶碗



桑原専慶流いけばなテキスト615号　2014年9月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

出合い花（12）

仙溪

波布草（はぶそう）
葉鶏頭（はげいとう）

はぶ茶と呼ばれるお茶がある。

エビスグサの種子からつくられたお茶で、眼精疲労・胃弱・便秘に効果があるとされる健康茶のことで、エビスグサの種子は漢方でケツメイシと呼ばれる。

このはぶ茶はもともとエビスグサと同属（センナ属）のハブソウの種子からつくられていた。

波布草は北アメリカ南部から熱帯アメリカ原産の一年草。日本には江戸時代にハブなどの毒蛇や毒虫に咬まれたときの民間薬としてやってきた。

エビスグサとよく似るが、豆の莢（さや）が上向きにつくことと、葉の先が尖ることで見分けがつく。

そんな波布草の黄色い花と緑色の莢に、熱帯アジア原産のハゲイトウをとりあわせた。

来歴や原産地を知らずに、直感をたよりに選んだ花だったが、同じ熱い土地で育つ花同士、互いに通じ合うものがあるようだ。葉鶏頭も元になるヒユは若い葉と茎が食用になる。人と植物の関わり。その歴史をもっと知りたくなった。

花材　波布草（豆科）
　　葉鶏頭（莧（ひゆ）科）
花器　灰釉一輪挿

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2014年
10月号
No.616

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

花梨（かりん）

＜表紙の花＞　櫻子

花屋さんで花梨を見つけた。しなやかな枝の雰囲気に惹かれて活けたくなった。かりんの実はとても重い。重すぎて枝から落ちることもあるらしい。その実を支える枝はとても硬い。

硬くて重い木を活けるのは難しいので、そんな時は盛花はまずやめた方が良い。投げ入れで安定の良い花器を選ばないと倒れる事もありうる。

余分な葉は取り去り実の艶やかな美しさを見せたいと思う。この秋一番の大輪の一文字菊と赤いボリスベッカーを取り合わせて。

花材　花梨（薔薇科）
　　菊2種（菊科）
花器　焼締花器

稲科の植物

＜2頁の花＞　櫻子

夏の終わり頃から好んでグリーンスケールを活けている。

偽小判草（にせこばんそう）という和名だが、本来の小判草よりも花穂が平たくて艶がある。稲科の植物だが、葉も花穂も良く日持ちしてくれて、少しずつ枯れ色になりながらも足元の花を引き立ててくれた。

稲科の植物たちも多彩になってきた。昔から使われてきたのは薄（すすき）や粟（あわ）、唐黍（とうきび）、パンパスグラスなどだが、今回のグリーンスケールを始め、オバタス、バニカム、スモークグラス、などはまだ知らない人も多いかも。

1本ならとても優しく弱々しいが、集めていけると稲科らしい強さが現れる。実際見た目だけでなく丈夫な草花だ。取り合わせた花が終わっても、又新しい花といけ直したり、ドライフラワーとして暫くの間飾って楽しんでいる。

稲科は、食物としていけばなとして、本当に感謝すべき植物。

花材　グリーンスケール（稲科）
　　ビバーナムの実（忍冬科）
　　鶏頭4色（莧科）
花器　波文陶花器

自然の煌めき

＜3頁の花＞　仙溪

薄と秋草3種の投入。薄は茎の中程で切って、穂の位置を低くしている。

薄の穂が出ると秋なんだなーと感じる心。秋刀魚や栗ごはんを食べても同じように感じられる。そんな感覚を持っていることに、有り難いと思う。

薄の穂にもいろんな色の違いがあることを、花をいけながら教わった。個人的には赤みの強い穂に惹かれる。

自然の煌めきに出合いたくて花をいけていると云ってもいい。花器を選び、とり合わせを考え、いけ方を工夫して新たな煌めきに出合おう。

花材　薄（稲科）
　　秋明菊（金鳳花科）
　　二輪菊（菊科）
　　桔梗（桔梗科）
花器　耳付陶花瓶

おもむくまま

仙溪

3色のネリネをそれぞれ3本、4本、5本とり合わせて、合計12本いけた。心のおもむくままに、3つの色を不規則に配置してみた。ふんわりとした優しさが感じられる。

このいけ方ではなく色別に集めていけると、色彩をより強く感じるいけばなになる。同じ花材をいけても、いけ方次第で受ける印象が違ってくることを、いろんないけ方を試しながら、実感として身につけていただきたい。

相手に選んだ檜扇（ひおうぎ）の実は、短く集めてみても、自然な枝の動きのため野趣的な雰囲気が残る。そのためネリネも野に咲くイメージでいけている。もっと沢山の実のかたまりをつくれたとしたら、ネリネの配置もより強いものにしただろう。

花をいける時、自然調か現代調か、どちらでいけるのかを決めていけるのは大切なことである。

ネリネの茎の線、花どうしの空間に注意していけすすめる。本数が多いので難しいが、花が居心地良さそうな場所にいけるといい。ギョリュウで水際を隠した。

花材　ネリネ3色（彼岸花科）
　　南アフリカ原産
　　檜扇の実（菖蒲（あやめ）科）
　　東アジア原産
　　御柳（ぎょりゅう）（ギョリュウ科）
　　中国原産

花器　紺色釉陶鉢

立華時勢粧を読む　⑥

立花秘傳抄　四

（前号の続き）

松竹梅三瓶の事

松竹梅の三瓶は、祝言の花にして、三瓶のならべよう古来説々あり。まず一説には

竹　中
松　上座
梅　下

かように並ぶるこころは、松に相続いて、竹は目出度きものなれば左に立てる。又云う、松竹梅の言葉の序をもって、座をさだむるといえり。

梅　二
松　一
竹　三

又かように並ぶる心は、梅は諸花の長にして、春に先だつゆえ、花の兄とも云う。さるによって、左に立てるとなり。又云う、松竹は四季ともに用う。梅は当季の珍花なる故、竹の上に立てるともいえり。当代多くはこの儀にしたがう。

松竹梅三瓶の時、松竹の方にも、梅をつかいて苦しからず。中央は直心なり。梅は除心にても苦しからず。胴、前置の二色は、三瓶ともに替えず。一方の花あつき時は、一方かるく立つべし。

松竹梅の三瓶を、一瓶によせたる時は、心は松。請は竹。副、流枝には梅を用ゆ。直心にも除心にも立てる。然るに予この花形のこころを取て、松のたぐい一色、竹のたぐい一色、梅のたぐい一色、この三色をもって外の草木をまじえず、あらたに花形を指し出して、図にしるすものなり。これ古人の指しもらしたる花形にして、真の松竹梅とも、名付くべきものか。

棚の上の花は（胴束という）長ひくく、横長く、景気すさまじく、たとえば心は大木を見るがごとく、流枝は千丈の松、岩上によこたわるがごとく、ちいさき物を大に、景気をうつす。これ一つの習なり。

立花陰陽の事

夫陰陽わかれて、天地となり、人その中に生して諸道諸芸を翫ぶに、陰陽そなわらずと云う事なし。まして立花において。草木出生の道理をかんがえ、野山薮沢の景気を瓶上にうつすに、陰陽を離る事なし。これ立花第一とする所なり。

土は本陰なり。草木は陽気を請けて、発生したる物なり。土をはなるれば、必ず枯る。水をもって養う時は、陰陽和合して枯れず。然れども、かりなる物ゆえ、久しからず。又冬の花を、室へ入れて陽気をかり、夏の花を井に釣りて、陰気をかる。されば陽中の陰花あり。又陰中の陽花あり。陰ばかりにては咲かざるゆえ、世上に黒色の花なき物とぞ。

古詩に

化工不隔銅瓶水　一夜芙蓉三四花

古歌

立花の　うき世の水に　ひたされて
命はきれて　きれぬ物かは

居所によってこれをいえば、明かりの方を陽にとり、珍花残花、主居客居の立て様あり。理をもってこれをいえば、瓶の内に陰陽ありて、ささぬ草あり。形をもってこれをいえば、きおいてかたきものは陰なり。なびきてやわらかなる物は陽にして、花形を調ふるところなり。数をもっていう時は、調は陰、半は陽。これ祝言不祝言をわかつ物なり。赤白円方、長短軽重、左右高下、みな陰陽にして、一瓶の花を成就する所なり。

備考

「松竹梅」についての文中の「左」は向かって右。また、「序」とは順序の意味。

「化工」とは造物者のしわざ。天のしわざ。

数の偶数＝調（陰）、奇数＝半（陽）。

※文中で「真の松竹梅」と名付けられた立花図。

松、竹、梅の類いだけで立てられている。

第九十六図
立花　松除真
松竹梅　冨春軒
松　梅　竹　熊笹

※参考文献

『いけばな美術名作集　第三巻　立華時勢粧』（日本華道社刊）

『花道古書集成　第一期第二巻』（大日本華道界刊　思文閣出版刊）

NHKテレビ（Eテレ）
きょうの料理
「親子丼・いなりずし・おにぎり」
桑原櫻子
放送日　9月15日(月)(祝)
9月16日(火)　再放送

仁清生地の花入れ

櫻子

仁清生地とは京都の清水焼を形にした野々村仁清の作風を生かした生地の事。淡い卵色の生地で暖かみのある焼き物である。

縦線の柄が素朴で優しいので、秋の風情を感じる花を取り合わせた。

花材　チョコレートコスモス（菊科）
　　アスチルベ（雪の下科）
　　オランダセダム（弁慶草科）
花器　仁清線模様花瓶

旭葉蘭　七葉

仙溪

花型　生花　行型
花器　煤竹竹筒

葉蘭は百合科・葉蘭属、中国原産の常緑多年草。根茎を乾燥したものを煎じて服用すると、利尿、強心、去痰、強壮作用がある。春に地表すれすれに花が咲くが目立たない。

葉は根茎から直接出て一枚ずつ立つ。最初は巻いた状態で出てくるが、日に当たると成長が止まるため、巻きの外側はせまく、内側はひろくなる。葉には右巻きと左巻きがあるので、葉脈の右の広い葉と、左の広い葉ができる。

このような葉の性質を見分けて、美しい姿にいけることが大切である。

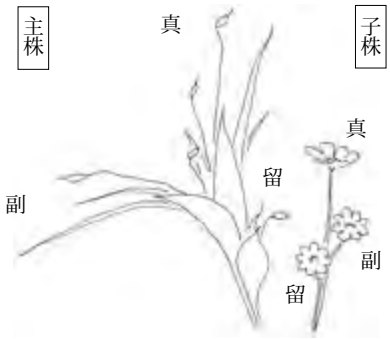
紫蘭（しらん）　秋桜（こすもす）

＜11頁の花＞

仙溪

花型　生花　株分
花器　耳付陶コンポート

紫蘭は蘭科・紫蘭属の多年草。春に紫色の花が咲く頃は背が低いが、晩夏の実の頃には葉も花茎も伸びやかになっている。花茎を抜きとり、葉も一枚ずつにしていけている。秋



桜と株分けにすると、紫蘭の個性が際立つ。はじめて合わせてみたが、感じの良い組みあわせである。

レモンちゃん

彼が家に来て2年。いけばなを見る目も肥えてきたようで、あーこわい。どうやら気に入るとそばまで来てくれる。ただ花の水が呑みたいだけという噂もあるが。

写真右から7月20日、檜扇生花のそばでほっこり。9月16日、花梨と菊二種の投入を拝見中。レモン先生、お手柔らかにお願いします。

桑原専慶流いけばなテキスト616号　2014年10月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

出合い花（13）

仙溪

草牡丹（くさぼたん）の実　バンダ

草牡丹をはじめていけた。

金鳳花科の仲間は花のあと白い毛がのびる。例えば同じ金鳳花科の翁草は、花後の白い綿毛を翁の白髪頭に例えてその名がある。

草牡丹は金鳳花科・仙人草属で、日本原産の半低木。下部が木質化して枯れ残る。名前にあるように、牡丹の葉に丸みを加えたような葉である。花は淡い紫色の釣り鐘状で、下向きに集まって咲き、先端が4つに割けて反り返る。

花は可憐だが、花のあとには写真のような個性的な姿になる。出合わせる相手も、個性的でしかも色鮮やかな花を選ぶことで、草牡丹の実の造形美を際立たせたい。美しいピンク色のバンダは絶妙な出合いを生んでくれた。

花材　草牡丹の実（金鳳花科）
　　バンダ（蘭科）
花器　陶花瓶「白珠」

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2014年
11月号
No.617

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

山野草の紅葉

〈表紙の花〉　櫻子

山芍薬の葉はバラバラで間が空いていけにくいと思っていたが、見事に茂ってしかも色づいている。2本花瓶にいけただけでも充分迫力がある。長くは持たないが、一時でも山の命を感じることができる幸せ。山採りか栽培か、いずれにしても採る人や育てる人に感謝の気持ちをもって、大切に花をいけたい。

特別な花材には、いい器を。蔵の奥から大きな花器を出してきて、山芍薬をいけるとぴたりとおさまった。鍾馗水仙（リコリス）と紅葉した薄の葉は、季節の色と空間のひろがりに。

花材　山芍薬の実と葉（牡丹科）
　　薄（稲科）
　　鍾馗水仙（彼岸花科）
花器　掛分花瓶（清水保孝作）

赤い実のなる木

〈2頁の花〉　仙溪

秋から冬にかけて、赤い実をいけることが多い。稽古にもよく使うものに野茨や鈴薔薇、敷山査子がある。少し高価なものでは七竈、飯桐、山帰来、ビバーナム。お正月の南天や千両、万年青も赤い実ができる。そしてさらに高価な赤い実の花材として梅擬がある。

日本の本州、四国、九州に分布す

る落葉低木で、葉と花が梅に似ていることからこの名前がある。

葉が自然に落ちる前に切るので、出荷前に葉をすべて落とすのが大変らしい。実の大きい「大納言」も見事だが、父は作例のような小粒の実がまばらについた野趣のある枝のほうが風情があって好きと云っていた。季節の菊を合わせると凛とした空気がただよう。

花材　梅擬（黐の木科）
　　糸菊（菊科）
　　ピンポン菊（菊科）
花器　碧釉花瓶

西洋陶器にいける

＜3頁の花＞　櫻子

糊空木（のりうつぎ）の園芸種「水無月（みなづき）」は、白い装飾花が無数に集まって大きな花序をつくっている。どこか外国の香りのする花なので、花器にはデルフトを選んだ。デルフト陶器はオランダの焼き物。「花ふたり旅」ではこの器に母が二種類の向日葵をいけている。絵付けに赤色が入っているためか、秋色の花が似合う。私も母と同じ色合いを合わせている。

水無月の優しい秋色はあえて後ろに配置し、木苺の濃い秋色を前に重ねて全体を引き締めた。明るい黄色の薔薇で、色調にメリハリをつけた。

花材　糊空木（のりうつぎ）（紫陽花科）
　　薔薇（薔薇科）
　　木苺（薔薇科）
花器　デルフト陶花瓶

蔓梅擬の立花

〈4頁の花〉　仙溪

花材　蔓梅擬　油灯台躑躅　鶏頭
　　糸菊　竜胆　伊吹　苔木
花器　大谷焼花器

今月号は掲載できなかったが、「立花時勢粧」の内容を通して、立花により興味を持たれた方も多いと思う。立花には九つの役枝があり、それぞれが互いに影響しあって一瓶の立花が成り立っている。非常に複雑ないけばなだが、全体の風情というものを大切にしたい。形になればなんでもいいわけではない。

姫柾木　<5頁の花>　仙溪

花型　草型　留流し

花器　竹筒

柾木は錦木科の常緑低木あるいは小高木で、生垣などに利用される。作例の姫柾木や、大きな葉で斑入りの鼈甲柾木が生花の花材になる。

ちなみに、蔓梅擬も同じ錦木科である。

姫柾木は枝にねばりがあるので、生花の稽古にはもってこいである。草型、留流しにしたが、留の枝の切り口を工夫しないと、枝先が前へ来てしまうので注意のこと。

■冒頭発言

和食〜京と広島　世界が認めた自然の恵み（詳報）

広島・京都文化フォーラム2014

祝いや弔事の場に不可欠　荒木さん

京都の伏見で、魚三楼という料亭を営んでいます。1764年に初代が四国の讃岐（香川県）から出てきました。江戸時代、伏見と京都は違う町でした。江戸、大坂、京、の三都に次ぐ都市の一つで、伏見港という港がありました。

伏見は、幕府の直轄地です。参勤交代で西国の大名は、三十石船に乗り大坂湾から1日がかりで川を上って来た。そこに藩邸があり、休んでいくんですね。そういう歴史の中で私どもは、できるだけ瀬戸内海の魚を使った料理を提供しようと今も目指しています。

タイという魚は、日本中で珍重されますし、おいしい魚です。昔は、タイのことを魚（うお）と呼んでいました。高級魚を表すのが、魚三楼の「魚」です。

京都の料理とはどんなものでしょう。宮中料理である有職料理、武家の本膳料理、京都には数多いお寺の精進料理、そしてお茶の懐石料理。それらが全て合体して、町衆に食べやすくしたのが今の京料理といわれています。有職料理といっても、食べる機会はほとんどない。本膳料理も今はなかなかありません。けれども、そのエキスは京料理に入っていると思います。

京都は、本当に四季が表れやすい。冬は心から冷えます。春は桜を楽しめる。夏は、嫌というほど暑いです。秋になると紅葉ですね。それをいかに料理に落とし込み、目で楽しむかというのが、京料理です。

和食が無形文化遺産となりました。季節感があり、多彩な食材があり、いろいろな調理法があるのが日本料理です。正月は一族で祝い、春は花見でうたげをする。そうした多様なお祝いや弔事がある。家族や知人が集まり、会食をする。そうした役割も文化遺産に選ばれた理由の一つです。

もう一つは、口の中で調理するということ。つまり一汁三菜。白いご飯を食べるために、おかずを食べ、ご飯を食べ、みそ汁をすする。いろんな食材を複雑に食べるのは日本人ぐらいだそうです。京料理はそうした和食らしさを多く含んでおり、次の世代に伝えていこうと頑張っています。

普段のご飯作りを大切に　桑原さん

私は、京都の真ん中、中京区に住んでいます。まだまだ京都には、街中にも町家がたくさんあります。江戸時代から続く、いけばなの家に生まれ、夫が15世家元を務めています。

玄関を入ったところに細い路地があり、長さは30㍍あります。路地を入ってくる皆さんは、最初は緊張して来られるのですが、水を打ってあり、季節の花を飾っているので、ほっとされるようです。そんな思いをしてもらえたらと、いつも打ち水をしています。

家の至る所に花があり、稽古で残った花は、玄関や高卓の上に飾り、もちろん床の間にもあります。中庭には白川砂を敷き、季節の木、花を植えています。

うちの流派を始めた桑原冨春軒仙溪は、立花の名手でした。自然をうまく取り入れた花を立てた人です。立花は、いけばなの元の姿。お寺の本堂や仏壇の供花などで、これに近い形をご覧になったかと思います。立花は江戸時代中期になると、もう少し生けやすい生花という形になりました。

私は、こういう家に生まれ、小さい時から花と一緒に暮らしてきました。一見、優雅なようですが、花器の出し入れや花を挿したり抜いたりと、休みなし。何て大変なんだろう、どうしようと思っていました。

そこで、毎日のご飯を私がちゃんと作ってあげたら、きっとみんなもっと健康になれるし、重たいものも担げるのではと思いました。そうして自然に料理の道に入っていきました。

私は小さいころからおばあちゃんにご飯を作ってもらい、昔ながらのおばんざいを食べてきました。それがあまり好きではなくて。でも今は、常備菜にもなり毎日の食事にうまく取り入れたい、と思っています。

何でもない普段のご飯を作ることを大切にしたい。いけばなも本職で大切な仕事ですが、私は数カ月に1回、料理サロンといって、いろんな人に料理の魅力を伝える教室を開いています。そこでは、楽しくなるような料理を提案しています。自分ではかっぽう着姿のようなスタイルが1番似合うと思っています。

広島湾北側は「箱庭の海」　川上さん

広島の海の魚介類で1番に挙げられるのがカキ。養殖の始まりは、江戸時代の初め、広島に移封された浅野長晟が紀伊（和歌山県）から持ち込んだとされる。石に種を付けて沖にまいて大きくするので、家で食べるくらいしか採れなかった。それが、浅瀬に置いた竹や細い枝に幼生を付着させて育てる「ひび建」が導入されて発展した。

私が長年暮らしてきた広島市南東部の丹那地域では、1780年ごろにひび建ができたようです。南風を受ける広島湾では地域ごとに建て方が違います。

今の若い人には想像できんでしょうが、私が子どものころは丹那沖にも広々とした干潟があり、すごい数の生き物がすんでいた。波止場を抜けて一歩外へ出ると、もうシャク（アナジャコ）の穴がある。20匹、30匹と釣って、天ぷらにしてもらう。そのうまいこと。今の若い人は魚離れして、海のものに見向きもせんようなけど、そういう人に食べさせてあげたら、すぐ海に戻って来る。絶対。それぐらい、おいしかった。

じっちゃんと櫓をこいで島に渡り、ガザミというワタリガニを捕る。前の晩に仕掛けて朝に揚げると、15匹も20匹も捕れた。

貝もオオノガイ、マテガイなど。これらも天ぷらがうまかった。タコでもマダコや手長ダコがおって、ウナギもようかかった。

広島湾の魚介類で1番目がカキなら、2番目は小イワシ。刺し身、天ぷらがうまい。3番目はチヌ（クロダイ）。独特のにおいがするが、調理してそれを除けば味そのものはタイよりうまいと思う。チヌ飯という丹那に伝わる伝統的な炊き込みご飯もある。

私は広島湾北側を「箱庭の海」と名付けた。カレイやアイナメ、アナゴ、ウミタナゴ、ギザミ、キスと、いろいろな魚がカキいかだの周りにいる。近年はアマモ場が少なくなり、メバルやカレイ、カワハギが減ってきた。箱庭の海で取れた地物の魚は最近、広島の市場でもこくわずか。近海物といっても、山口や岡山などから来る。私たち漁師にはどうにもならない面もありますね。

多彩な味わいやヘルシーさから、海外の人たちも魅了する和食文化を再発見しよう。「和食〜京と広島　世界が認めた自然の恵み」をテーマに9月20日、広島市中区の中国新聞ビルで「広島・京都文化フォーラム2014」（中国新聞社、京都新聞社主催）が開かれた。

京料理店の主人、華道副家元の料理研究家、広島のベテラン漁師が昨年、国連教育科学文化機関（ユネスコ）の無形文化遺産に登録された和食を未来に伝えていくヒントを探った。

パネリスト

「魚三楼」主人
荒木稔雄

華道桑原専慶流副家元・料理研究家
桑原櫻子

元広島市丹那漁協組合長
川上清

コーディネーター
中国新聞社文化部長
渡辺拓道

6

目と舌で季節を味わう

だしのうまさ膨らませ 荒木さん
心こめた調理で絆強め 桑原さん
自分で作った味が最高 川上さん

■幸せな思い出

―皆さん、食にまつわる幸せな思い出をお持ちだと思います。紹介していただけますか。

川上 18歳からカキ養殖をし、現在84歳。元気にこれたのは、ずっとカキを食べてきたからでしょう。大自然の恵みであるカキやイワシ、そういうものをしっかり食べてください。

十数年前、日本全国から千ぐらい集まる魚料理のコンクールに「カキの3点盛り」を持って行き、それが入賞しました。その2年後には、あなご丼でも入賞。それはうれしかった。

千葉県の銚子市長さんから、小イワシ料理を教えてほしいと現地に招かれたこともある。海流の影響か、大きなイワシが捕れなくなって小イワシが揚がるようになった。でも、食べ方を知らんのじゃいうて。刺し身に天ぷら、ぬた…。奥さん方に喜ばれました。

桑原 昼夜のいけばなの稽古などで忙しく、私の小さいころは家族それぞれが出先で食事をして帰っていた。学校から帰ると誰もいなくて、寂しい思いをしました。それで大学生の時、母に代わって私が料理を担当しようと決めたんです。

初めのうちはカレーライスやグラタンしか作れなかったけれど、楽しみにして帰って来てくれる。みんながタ食の時間に集まってご飯を食べる。いろんな話ができ、食事の時間は大切なものなんやな、ほんまに家族の絆が強まるんだなと実感しました。それに、料理好きの父から作る楽しさを教えてもらったことで、今の私があるのだと思います。

荒木 私は家内と長男、長女、次女と5人家族。食についていゃべっていると、みんなが台所に寄ってくる。夜は、おかみの仕事を終えて家内が帰宅するころまでに娘たちが何か作っていたり、長男がそこに帰って来たり。そんな光景を見ることがうれしいなと。家では京料理みたいなものは出てきません。何かというとチーズだったりハムだったりしますけれど、家族が和気あいあいとしている姿というのが、本当に幸せなことじゃないかと考えています。

■食習慣はいま

―ファストフードが当たり前になるなど、日本人の食習慣が変わってきました。食文化について気になること、心配なことをお聞かせください。

荒木 ライフスタイルの変化といいますか、特に若い人たちは走り回っているような時世です。何かをかじりながら電車に乗っている。行儀は悪いけれど、そんな時しか食べられへんのかなとも思います。

日本食のそば、天ぷら、すしも、江戸時代はファストフードです。スローフードだければ、ということもないでしょう。

だしのもとなども、使いようやと思うんですね。もしなかったら、今の家庭でおみそ汁はどうなっているだろうかと。だしのもとも日本料理の一翼を担っている部分はあるわけです。

ただ、十把ひとからげにしない。ええもんを食べに行くときはええ格好して、いい雰囲気で。忙しいときは、牛丼店でささっとかき込んでというのもありやと思うんですね。忙しい中でも食べるときの楽しさは一緒。それを共有していけたらなと考えています。

桑原 みんながもっと家の味を大切にしてくれたらいいのになと思います。どの都市でも行列ができるようなお総菜屋さんは、同じような味です。売れている分、ちゃんと管理されているというか、その土地の特色の味はないんですよね。家庭を考えてみてください。例えば卵焼き。それぞれの家で違う。甘かったり塩辛かったり、形が悪かったり、軟らかかったり。

また、料理は勘を養ってくれると思うんですよ。肉や魚の焼き加減、野菜ゆで加減は、レシピでは表記しにくい。大きさや量も、その都度変わる。自分で料理して慣れてくると、外へ食べに行っても、大体のことは分かるんですね。おいしいとか、まずいというだけではなく、料理が、心を込めて作られているかということが分かるようになる。そこが、自分で料理する一番大切なポイントであると私は思っています。

―冒頭で若者の魚離れを指摘された川上さんは、かき料理で76の創作レシピをお持ちです。おいしく食べることは何でしょう。

川上 公民館で「漁師の作る魚料理」の講師をしていて、カキも時々やります。コンテストで入賞したカキの3点盛りのうち一番簡単なのはニンニクオイル炒め。薄切りにしたニンニクをサラダ油でちょっと焦げ目が付くぐらい炒める。それを取り出して、次にカキに小麦粉を付けて両面をうっすら焼く。中に火が通ったところで、かきしょうゆをぱっとかけ、混ぜて食べる。これが一番うまい。

どの料理も、カロリーや栄養分がどうこういうよりも、作って自分の味で食べてほしい。私は、それが最高だと思います。

桑原さんの創作料理「焼き栗ご飯と里芋の田楽」

■何ができるか

―これからの和食文化はどうあるべきか。また、何が期待され、私たち市民には何ができるのでしょう。

荒木 日本料理で一番大事なのは、だしの文化です。いりこ、カツオ、スッポン、フグ…。いろんなだしがあります。中でもカツオと昆布のだしがとりわけ重要だと思います。

フランスでは近々、かつお節を作る話があるそうです。世界ナンバーワンレストランのシェフは、シカ肉を使って、しか節を作っています。北海道ではサケで節を作っています。

なぜ、だしが世界でもてはやされるのかというと、だしはせロカロリー、健康的です。だしのうま味成分は、満腹中枢を刺激する物質を含んでいる。外国人が日本料理を食べていると、そんなに食べていないのに、おなかがいっぱいになったような感覚になるという話をよく聞きます。

だしは、小さいときから慣れていないと、かつお節や昆布のにおいが臭いということになります。子どもたちがだしを嫌いにならないよう、育ていくべきです。ヘルシーなだしを使い、いろんな食生活をしていくことによって、そのうまさというのがどんどん膨らんでいくと思います。

川上 若い人に魚を食べる習慣をどうつけてもらうか。結論は出ません。戦時中は米ぬかと麦ぬかをベースにヨモギを混ぜた蒸し団子がうまかった。戦後は米も野菜もなく何でもおいしかった。だから私は嫌いなものがない。今の人はせいたくに慣れていますが、昔の食べ物も知ってほしいですね。

桑原 先日出演したNHKの「きょうの料理」のテーマが「おふくろの味」。おにぎり、親子丼、いなりずしを作りました。その後、皆さんからメールやお手紙をいただいた。驚いたのは、いなりずしが皆さんそれぞれ、おふくろの味やと。その家の味が、ある程度の年齢になると懐かしくなり、自分で作ってみようとなるのでしょう。私は今まで、自分の家の味を守ってきました。こういうことを言い続けないといけないなと感じています。

海外で日本料理が認められるのは、日本人の勤勉さや器用さがすごく関係している。例えば繊細さから生まれた松花堂弁当は和食の文化やと思います。

皆さんが、毎日の食事を大切に思う気持ちを持ってくだされば、日本の食文化はずっと尊敬してもらえるはずです。

来場した人たちは、和食の奥深さに触れ、興味深そうに聞き入った

広島や京都の豊かな食材を生かした和食の魅力や継承について語り合うパネリストたち
（広島市中央区の中国新聞ホール）

あらき・しげお 1960年京都市生まれ。愛知学院大中退。伊勢長帝国ホテル店を経て、87年、料亭・魚三楼入社。2008年から魚三楼代表取締役。日本料理アカデミー総務委員長、日本レストラン協会理事、京都料理組合理事などを務める。

くわばら・さくらこ 1960年京都市生まれ。甲南女子大卒。両親は華道桑原専慶流の14世家元夫妻。祖父にいけばなの指導を受け、21歳で副家元を襲名。古典の立花、生花を今に伝える。NHK「きょうの料理」の講師を務め、家庭料理のサロンも開いている。

かわうえ・きよし 1930年広島市生まれ。広島（中）（現国泰寺高）を卒業し、48年から地元の丹那町でカキ養殖を中心に漁業に従事。78年から2004年まで丹那漁協組合長。公民館講座で魚料理を教え、江戸時代の「かきコース料理」を復元した。著書に「箱庭の海」「続・箱庭の海」など。

主催 中国新聞社、京都新聞　**後援** 広島県、広島市、京都市観光協会

7

松一色　＜9頁の花＞　仙溪

花型　行の行

花器　銅立花瓶

日本いけばな芸術展の歴史展示に立てた立花。真の幹は自然の曲がりである。正真の晒木が効いてくれた。

第47回 日本いけばな芸術展

テーマ「花という未来。」
会期　10月8日(水)～13日(月)
会場　大阪高島屋7階

1次展　10月8日(水)～9日(木)
2次展　10月10日(金)～11日(土)
3次展　10月12日(日)～13日(月)(祝)

桑原専慶流いけばなテキスト617号　2014年11月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

出合い花（14）

仙溪

秋海棠（しゅうかいどう）
上膓杜鵑草（じょうろうほととぎす）

石清水のそばでしっとりと咲いている、そんなイメージでいけてみた。

自分の中では上膓杜鵑草も秋海棠もそのような場所に生えている光景が目に浮かぶ。清水の周辺の空気は湿り気をおびて、葉はつねに潤っている。

秋海棠は中国原産の多年草。日本には江戸時代初期に渡来した帰化植物。ベゴニアの仲間特有の偏った形の葉をしている。

上膓杜鵑草は杜鵑草（ほととぎす）の仲間だが、花の形が全く違う。名前につけられた上膓は、仏教用語で年功を多く積んだ高僧のことをさすらしい。

ごつごつとした土っぽい花瓶に水を満たしていける。口の片側に寄せて水面が見えるように。こんな素朴な感じのいけばなが、意外と難しい。

花材　秋海棠（秋海棠科）
　　上膓杜鵑草（百合科）
花器　焼締花瓶

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2014年
12月号
No.618

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

出合い花（15）

〈表紙の花〉　仙溪

アマリリス
レックス・ベゴニア

以前、インドから持ち帰った牛の置物の背中に、ガラスの酒杯をのせていけたのが、ベゴニアをいけた最初だった。手作りの真鍮製の鞍で器を固定したのだが、苦労の甲斐あって父がたいそう褒めてくれた。

牛にいけたのはアイアンクロスというベゴニアだったが、この赤いアマリリスの相手にはカンカンという名前がついていた。葉の表面が銀色に光り、私の手のひら程の大きさがある。

アイアンクロスもカンカンも、インドからベトナムにかけて分布するベゴニア・レックスからの改良品種。アマリリスは中南米原産。赤と黒のガラス花器は北ドイツで父が買ったもの。この小作にも様々な物語が詰まっている。

花材　アマリリス（彼岸花科）
　　レックス・ベゴニア
　　「カンカン」（秋海棠科）
花器　赤黒ガラス花器

寒桜（子福桜）

〈2頁の花〉　仙溪

なぜ冬に咲く桜があるのだろう。十月桜、冬桜、子福桜など、年に二度咲くのはなぜだろう。

一説には日本の桜の先祖とされるヒマラヤザクラがもともと秋に咲くことから、先祖返りの現象と考えられている。

ヒマラヤザクラの咲くネパールは緯度的に

は亜熱帯。冬の気温は東京よりも高い。秋咲きであったものが、日本の厳しい寒さに耐えるために「休眠」することを身につけ、暖かな春に咲くようになったそうだ。百万年の歳月をかけて東へ東へと来てくれたサクラ。その中に故郷を懐かしんで秋に咲くものがあってもおかしくない。

私達はそんな冬に咲く桜を見て勇気づけられる。ひょっとすると、人を励ますために咲いてくれているのかもしれない。日本人にとって桜はやはり特別な存在である。

花材　寒桜・子福桜（薔薇科）
　　菊三種（菊科）
花器　陶花瓶（宮下善爾作）

白玉椿をいけて

＜3頁の花＞　櫻子

今年は庭の山茶花や椿が例年よりも早く咲き始めた。蔵の前の山茶花が大好きで、咲く時期をいつも心待ちしている。蕾も早い時期から沢山つけ始めて、十月末には一斉に咲き始めた。いつもなら十一月に入ってから先ず最初の一輪が開くのだが。

昨年植えた白玉椿も同じ頃にひと花咲いた。椿の木は庭に多いのに、今まで白玉椿が無かったのは不思議なくらい。椿の種類は多いが、葉が形良く格好も良くていけやすい椿はそんなに多くない。藪椿や白玉椿はさり気なく足元に収まってくれる。

台切りデンファレと若松と取り合わせた。

花材　若松（松科）
　　白玉椿（椿科）
　　デンファレ（蘭科）
花器　陶花器

水仙

仙溪

花形　行型
花器　陶水盤

天仙、地仙、水仙という言葉があって、草花の中でも最も高貴な感じをもつ花といわれる。初冬十一月より晩冬の二月まで、初季、盛季、晩季の三期にわけて挿法が定まっている。

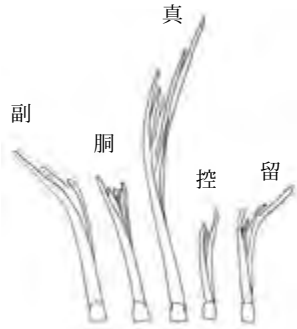
初季には花二、三本程度で葉組の中に花を低く入れ、袴も低く見せる。

十二月に入って盛季となり、やや花高く挿して五本程度まで。花を入れない三枚組みも加えて七本程度までいける。袴もやや高く見せる。

一月下旬より晩季。多少乱れの心をあらわし、開花を多く入れ、三枚組みの若葉を少なく入れる。

花器の変化によって、それに適した花形をつくりあげる。

作例は水仙五本の生花で、初季から盛季へ移る中間といった花形。十二月中旬にいけるなら、もう少し花の位置を高くいける。



立華時勢粧を読む　⑦

立花秘傳抄　四

（前号の続き）

十三ヶ條法度の事

大輪なる花のたぐい短く指すこと。
葉のある物を花ばかり指すこと。
花とその葉と添えたる間に、余の物を指す事
同じ物を二所に指す事。但し色替わりては苦しからず。
草にて木をつつみ、木にて草をつつむ事。
たけくらべの事。（一方除て上るこずえの同じきは苦しからず。）
枝葉の水につかるようなる事。
切枝とて十文字に見切る事。
本きれの事。
指枝とて面へ長く出る枝の事。
壁枝とて後ろへ長く出る枝葉の事。
後ろより前へまわる枝の事。
瓶の口よりさがる枝葉の事。
以上

古代十ヶ條法度の事

ぬきとをし
主さす枝
ふくめんの枝
なけきの枝
見越の枝
胴ぎりの枝
両頭の枝
いだく枝
かさなる枝
引張枝
以上古き板書に出たり
右の外三十六ヶ條伝授の法度有定名目の法度共名付く

㋐同意にて嫌うべき枝の事　外これを略す

立花八戒

花白衣にて指事
庭木みだりに所望の事
他流の花を誹る事
主ある花形盗みて指す事
花を指すを後ろに立って見る事
花礼儀なくて見る事
人の花率爾になおす事
心花にあらざる事

（8頁へつづく）

十三ケ條法度の図

①大輪水ぎわ。
②葉のある物を花ばかり指す。
③花とその葉と添えたる間に、余の物を指す事
④同じ物を二所に指す事。
⑤草にて木をつつみ、木にて草をつつむ事。
⑥たけくらべ。
⑦水につかる枝。
⑧十文字。
⑨もとぎれ。
⑩むかふ指し。
⑪壁枝。
⑫後ろより前へまわる枝。
⑬瓶の口よりさがる枝。

㋑一木一草の中にてたけくらべ苦しからず。
㋒とも切れは苦しからず。

立花十徳

卑しうして高位に交じる
花に他念無し
衆人愛敬
語らず友と成る
草木の名を知る
席上常に香ばし
朝暮風流
諸悪離別
精魂養性
事とせずしてつかえ仏縁あり

立花十体

正風体　真の花をいう
幽玄体　除真立をいう
景曲体　砂の物をいう
野沢体　草花立をいう
池中体　水草立をいう
山頭有草体
山下有竹体
枯木強力体
一色体
乱曲体

右立花八戒、十徳、十体、ある師家秘書を写してこれを記す。

五節句の花、并びに　十二月に用うべき花、目録あるといえど、花の盛り遅速ありて、時節にたがい、又所によりて、まれなる草木もあれば、一応には定めがたし。とかくその時節相応の花、所々の珍しきをもって立つべきなり。

祝言に嫌うべき事

一草一木。一花一葉。六花六葉。四花四葉。四草四木。末のとまりたる物。枯れたる枝葉。苔晒木。名のあしき物。同釋教の名ある草木を嫌う。

茶会の花ならば、六花六葉、四花四葉、指しても苦しからず。又貴人高位より給わる花ならば、一花一葉にても立つべし。花の数多くとも、残さず指すものなり。

寺院の花には、釋教の名ある草、祝儀に嫌わず。雁足などは、古来より嫌う。外これになぞらえて知るべし。

立花にかつて用いざる物。香りのあしき物、いばらのたぐい、雑木、雑草、食物の類いなり。

わたましの花に、檜という名あしけれど、又火のくと云う義理をもってこれを立てる。又あかき花、あかき葉、赤き実のたぐいを、いむといえども、水木ばかりは水と云える名ありとてこれをゆるす。火のくと云うも、水木というも、むつかしければ、ささざらんにはしかじ。

古き花書に云わく、婚礼の花には、赤き花を聟のかたにさし、婦のかたにては、白き花を指すというは、夫婦陰陽の義によるか。蓋し赤きは陽にして末さかえ、白は陰にして不祝儀なり。婚礼の夜も色なおしとて、赤き衣服を用いる時は、婦の方とて、赤きを用いざるべけんや。

（釋教：釈教、釈迦の教え、仏教。　蓋し：まさしく。）

シチュー鍋にいけて

櫻子

シチューの中味がブクブクと煮え立つ様な雰囲気で青文字や枯れ紫陽花をいけてみた。

青文字は枝が折れやすく、先が尖っていて枝を集めるようにいけるのは難しい。

もっと沢山枝を買えば良かったなと反省。

青文字は早春の頃花を咲かせる。一つの蕾の中に3～4個の花が内包されていて、咲き出すと全体がボリュームアップして可愛らしい。

クスノキ科の木なので良い香りがする。切り口は山椒（さんしょう）の香りに似ているようにも思う。種子は辛いので、生姜（しょうが）の木ともよばれる。木肌が青いので青文字なのだが、黒文字よりも柔らかい気がする。

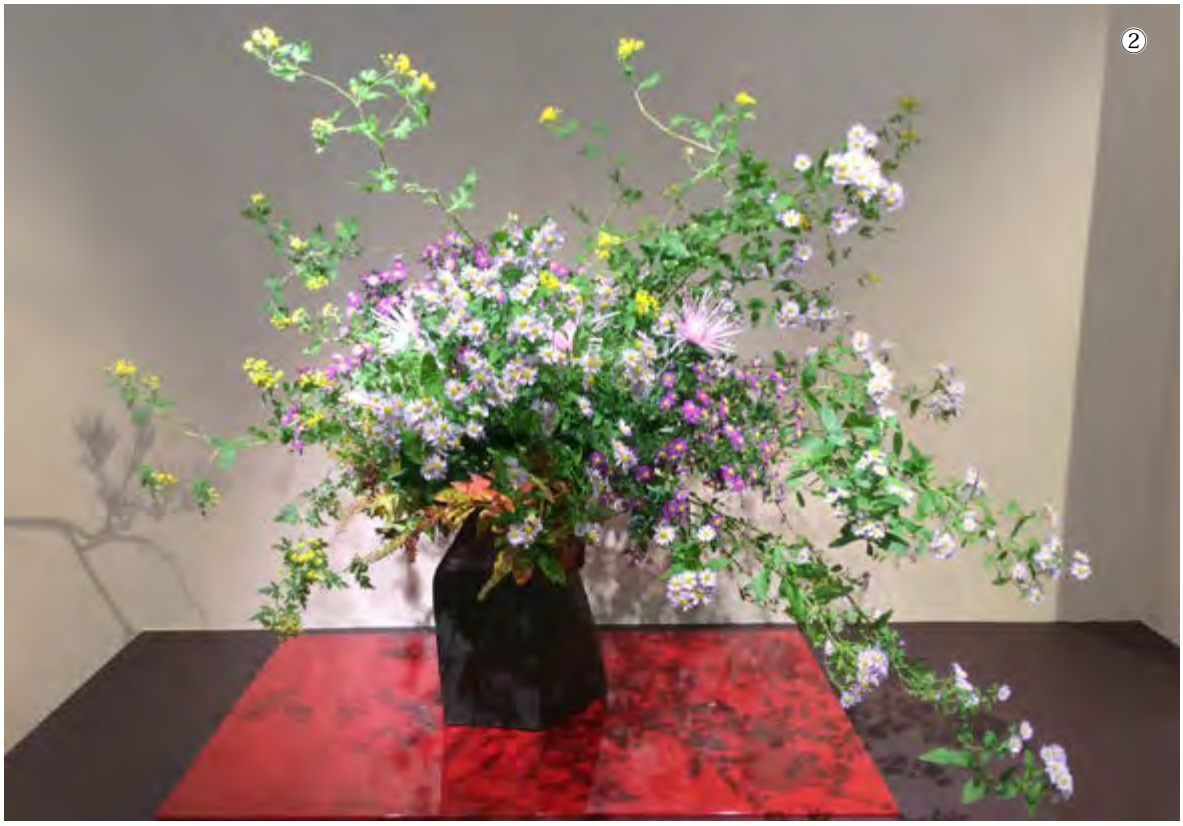
時折よく確認せずに黒文字の楊枝を買うと青っぽい木肌の楊枝であったりして要注意！これは青文字だと思う。

シチューの中味が冷めない様に、暖かそうなショールで包んで。

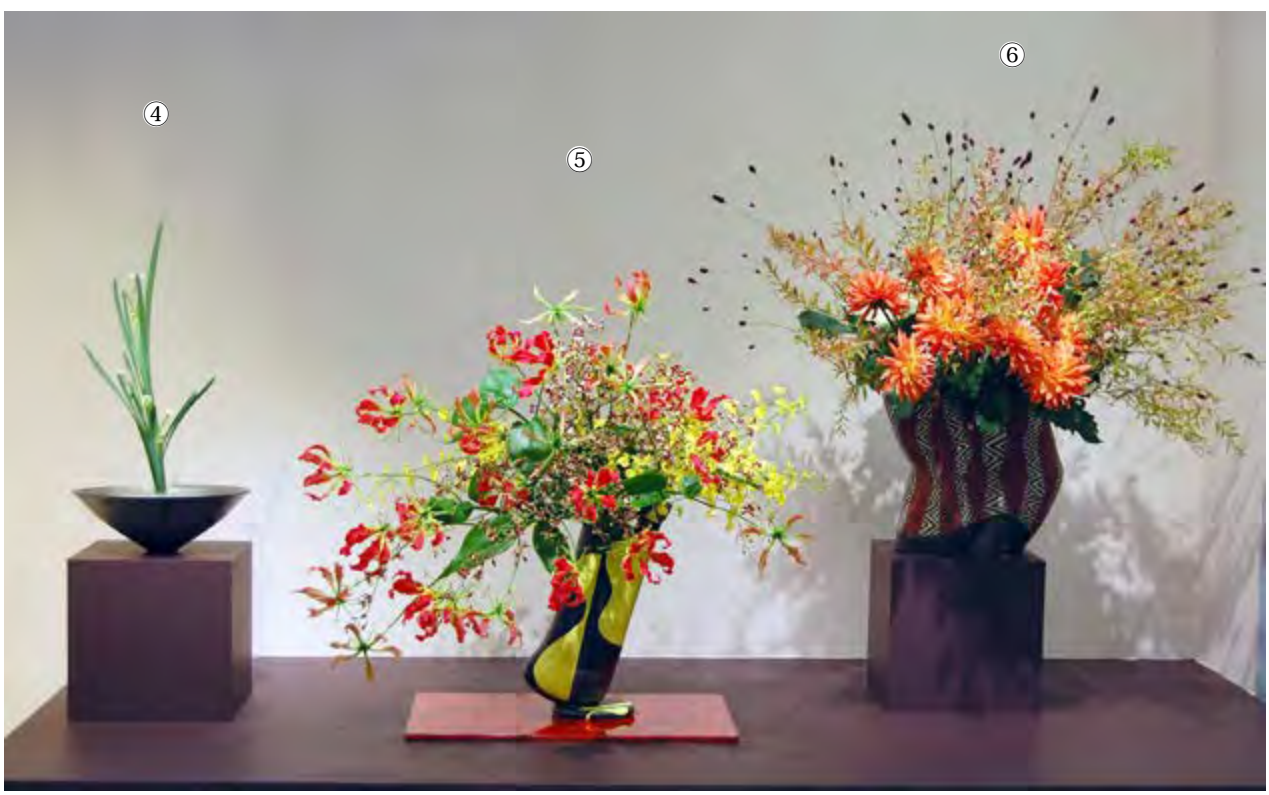
花材　青文字（楠科）
　　紫陽花（紫陽花科）
　　薔薇（薔薇科）
花器　陶製シチュー鍋

第65回 華道京展

テーマ「煌めいて京の花」



③


④
⑤
⑥

桑原専慶流いけばなテキスト618号　2014年12月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

草木の風興

仙溪

古い花書に「風興」という言葉が出てくる。室町時代後期、立て花の名手であった池坊専応の口伝を記述した「池坊専応口伝」は、次のような文章で始まる。

瓶に花をさす事、いにしえよりあるとはきき侍れど、それはうつくしき花をのみ賞して、草木の風興をもわきまへず、只さし生けたる計なり。

この一流は野山水辺をのづからなる姿を居上にあらはし、花葉をかざり、よろしき面かげをもととし、先祖さし初めしより一道世に広まりて、都鄙のもてあそびとなれる也。

この文章のあとも、「絶景もそこへ行かねば見られないし、絵を見ても夏涼しくはならず、秋に香りがするわけでもない。庭に山を築き泉を引くのにも大変な手間がかかる。（それなのに）僅かな時間で床にいけられた、ただ少しの水と小さな枝が、奥山の勝景をあらわし、風の匂いまで感じることができるのはまさに妙術。草木を見て心をのべ、春秋のあわれを思うなら、その悟りの種を得ることもできるだろう。」と述べている。

「立華時勢粧」が世に出るのは「専応口伝」からおよそ百五十年後。その序文でも「ちからをもいれずして高き峰、深き溪を小床に縮む。至らずして千里の外の勝景をみること、その術、諸芸の及ぶところにあらず。」とある。また、「立花八戒」の中では「心花にあらざる事」を戒めている。

おそらく富春軒仙溪も、「草木の風興をもわきまえず只さし生けたるばかり」ではいけないと考えていたにちがいないが、百五十年の間にシンプルな立て花は、より複雑な立花になり、形式化してゆく中で、今一度自然に目を向け、「出生の景気」を大切にすべきだと書いている。

風興という言葉は漢和辞典に「風趣興味」と説明されている。「味わい深いおもむき」とも言いかえられるだろうか。

自然に目を向け、出生をよく理解することと同時に、心に留めた草木の風興をいけるようにしたい。

初冬の風興

＜12頁の花＞　仙溪

秋の木瓜、咲き始めた水仙、寒菊の赤い葉。この三種のとり合わせは過去にもよくいけている。ただ丁寧にいけるだけで、初冬の風興が感じられる。どんな器にいけるかにもよるが。

花材　木瓜（薔薇科）
　　水仙（彼岸花科）
　　寒菊（菊科）
花器　陶花器（河井透作）